大震後に於ける
金儲の東京、全
実業復興奨励会編

国立国会図書館

特118
32

加

實業復興奬勵會　編纂

大震後に於ける

金儲の東京

全

帝國書房發兌

国立国会
51.8.16
図書館

特118
32

緒言

敢て量を以て本書の眞價を論ずる勿れ。本書は實に實業復興奬勵賞が、變災に依る倒産者及び失業者をして、更により多き失意と苦境に陷らしめん事を怖れ、特に巨資を投じて震災後の東京を調査研究せしめ、其資料の下に復興に伴ふ新職業並に經營改善の眞髓を捕捉して之を本書に收め、以て第二運命開拓の指針たらしめんを期せるものなり。若し產を亡い、職に離れ、而して職を求めて悶ゑ惑ふ者は須らく本書に問ふべし、本書は釋然として其歸趨を明示し、其處に新らしく強き復活の力か培ふであらう。

編纂の責任者として

震災の歳霜月　八雲貞雄識

大震後に於る『金儲の東京』目次

總論篇

帝都の復興も金儲から……

地震が殘して行つた成功の鍵……

東京全市金儲の鉢合せ……

金儲の鍵は何うすれば摑める……

金儲は本書に轉がつて居る……

職業篇

簡易に獨て出來る金儲(一)……

一、震災が產んだ商賣

二、誰も思ひ着かぬ新職業

三、斯う遣れば大繁昌

簡易に獨て出來る金儲(二)……

四、折れて曲る利益

五、驚く勿れ總資本拾二圓

六、景氣なほしの景氣汁

簿易に獨て出來る金もうけ(三)……

七、利用せぬ奴が馬鹿

八、金を貯めさせたり貯めたり

九、金儲は是れが一番

婦人の織手にも富の力(一)……

一、可愛い兒には買つて遣れ

二、手輕に出來る美容館

三、女らしい綺麗な仕事

婦人の織手にも富の力(二)……

四、婦人を要求してゐる職業

五、毎月六十圓が丸殘り

六、筆一本で立派に生活

婦人の織手から富の力(三)……
七、花の香の中で金儲
八、其日の仕入が直ぐ金に
九、遊びのやうな商賣
若し百圓の資本が有たら(一)……
一、一ヶ月二百圓の儲は確か
二、夫婦共稼ぎの嬉しさ
三、見れば屹度欲しくなる
若し百圓の資本が有たら(二)……
四、各國銘酒バーの新經營法
五、品物より愛嬌が寶物
六、出來さうで未だ出來ぬ商賣
參百圓資本を投じたら(一)……
一、素人にも遣れる請負業
二、傷物專門賣初め申候
三、三俵の米が一日にペロリ
參百圓の資を投じたら(二)……
四、眞黑の中から小判が光る
五、看板娘には必要無し
六、手と足を取合せた商賣
否でももうかる派手な水商賣……
一、馬鹿氣きつた營業振り
二、是れで儲からねば世間が嘘
三、斯う改良したら
奇麗で文化的な金もうけ法(一)……
一、生活改善と金儲が一緒
二、高いが當り前の流行品
三、郵便屋が儲けさせて與れる
奇麗な文化的な金もうけ法(二)……
四、驚く程增加した購買力
五、明るい新しい氣分の店
六、眞劍な趣味時代が來た
婦人を華客にする美しい商賣……
一、半わり美と生活藝術
二、其處榮心を捉へて

三、何處の家庭でも花の樣に
大きな資本には大きなもうけ(一)
一、三割以上の利益は確實
二、紀文も素足の大儲け
三、斯う經營したら
大きな資本には大きなもうけ(二)
四、名から儲かり相な美人館
五、新案特許を受ければ更に妙
六、確實と迅速が元手
金もうけも理論はたつた一つ

成功篇

今度大震災で金を儲けた實例……
(其の一)
一、百丁の算盤が始まり
二、義俠から拵へた品が飛ぶ
(其の二)
三、パンの買入が美事に成功
四、見當り次第買込む〳〵
五、お見舞の握飯配達
(其の三)
六、見る間に儲かる五百圓
七、震災喜劇で大當り
八、此方でも彼方でも御用
(其の四)
九、一ぱいの水から三千圓
十、人間を運んだ荷馬車
十一、大增の社會奉仕
(其の五)
十二、燒けた金庫で黃金の藏
十三、來るは〳〵亡者共が
十四、喧嘩半分で金儲
(其の六)
十五、機敏に資出した借用法
十六、不意な需要に全部賣きれ
十七、何でも無い復興財布で大儲
(其の七)

十八、何處迄も女に集る人氣
十九、思はぬ儲けの各演藝場
二十、防寒用で賣るは〳〵

結論篇

斯して富の成功者たる可し……

帝都復興の主腦者

後藤復興院總裁

山本內閣總理大臣

永田東京市長

震災後に於る金儲の東京

實業復興奬勵會 編纂

帝都の復興もお互の金儲けから

日頃から飲んで、誇張の形容詞を使用して來てゐる日本人には、殆んど其實際を言ひ現はす言葉のない程、今回の大震災は激甚を極めた悲慘の限りであつた。それだけに、其影響は燒野ヶ化した東京ばかりでなく、日本の全土は勿論全世界の經濟界にまでも波及してゐるのであるから帝興の復興は、こりもなほさず日本の復活を意味するものである。其復都を尤も現實に表象するものは建築物の復活であるが、そこに經濟市場の復活國民精神の復活が基礎をなさなかつたならば、帝都の復興、日本の復活ヶ云ふことは出來ぬ。即ち眞の帝都の復興は、吾々各人の復業生活の安定を得ることが第一條件である。それなら吾々は震災後、たとへ一歩でも精神の上に又生活の上に安定を見ね出してゐるであらうか。震災のために財產の總てを失つた人、震災のために永年手慣れた職業を失つた人、これ等の人々は到る處に群をなして「吾等に職を與へよ、然らざれば死を與へよ」ヶ叫ひながら、パンを求め、職を求めて、人間ヶしての生の悶へに、あらゆるエネルギーを傾倒してゐるのである。成る人が「食ふことが出來ないで餓死するヶ云ふ悲慘にくらべれば、寧ろ彼の地震の際に死んだ方が幸福

であつたかも知れぬ」と云つたのも、決して意久地のない弱者の世迷ひ言とのみ聞き流すことは出來ぬけれども實際世間はそれほど行きつまつてゐるであらうか、本當に求めて吾々の活きんとする道のすべては閉されてゐるであらうかお互に之を研究しそして新運命を開拓すると云ふことが、お互今日の使命でもあり帝都復興國是であるは云ふ迄もない。

地震が殘して行つた成功の鍵

痩我慢と見榮坊とは、日本人の傳統的特性であつて、今日でも尙ほ、かの武士は食はねど高楊子とか、侍の子は腹がへつても飢じうないかと云つたやうな俚諺を、男のの面目のやうに考へてゐる者もあるが、それは大きな間違で、人間としては何うしても活きなければならぬ。活きる爲めには先づパンを得ねばならぬ。パンを得んとする者が其代償である金を儲けんとするのは當然の約束であつて少しの不思議もないことで、所謂職業に貴賤なしとか、勞働は神聖なりとかの言葉のある所以で、「あの仕事は氣に入らぬ」とか「この商賣は下等である」とか云ふのは慥かに一種の虛榮で、本當に死ぬるか活きるかの境には、どんな人間にも見榮もなければ體裁もあるものではない。此事を最も赤裸々に說明したものは今度の大震災と大火災であつた。日頃は髮の毛一筋の亂れさへにも氣にする婦人が、あの地震の騷きには何うであつた細帶一つの浴衣姿で、肌もあらはに死と言ふものを忘れやうと悶ゐ狂ふた有樣は、一握の玄米飯に生を繼がうとした努力は、婦人既に此有樣である。男子の態は云はずもである。此場合何人がよく吾は武士なり食はず高楊子と云ひ、侍の子なりとて玄米の握飯を拒絕すの勇氣があらう。つまりは人間は眞に活きんとする努力の前には、見榮もなく虛榮もなく、僞りもなく戀もないのである。若し世の人々が、此僞らず飾らざる活きやうとした努力を移して、今後の新生涯を畫したならば、其處に新らしい意義ある運命を開拓し得るばかりでなく、帝國の國是である帝都の復興に寄與するこころが大であらうと信ずる。こころが咽元すぐれば熱さを忘る、の道理で一度地震が去り、火災が鎭まれば、以前

兒見榮坊的性情が擡頭して來て同じ活きんとする努力の間にも痩我慢的氣分が濃厚に現はれてゐるのは、寔に殘念なことで、斯くては其人々が招いて死地に陷るばかりでなく、遂には帝都の復興、即ち日本の「活」と云ふ大使命さへも之を果すことの出來ない結果になるのである。日本に取つて之れほど由々しい一大事があらうか。今にして此等の人々に、眞に働くべき自覺と、進むべき生活の一路を示さなかつたならば、或は自分達の考への時代錯誤であることに氣着かず、人を怨み世を呪つて、自暴自棄の人となつて了ふかも知れぬのである。それは其人自身に取つて復目業目得で、致し方がないと云へばそれ迄ではあるが、國家としては是れ程大きな損失はないのである。これ本會が巨資を投じて茲に震災後に於ける、何人にても多少の資本さへ投ずるなれば、最も安全に生活の保障を得る、職業を調査研究して、本書を大成するに至つた所以である。

東京全市到る處金儲の鉢合せ

機會の神は背後が禿頭であるから、一度やり過して了つては、容易に之を捉へることが出來ぬ。これは西洋の諺ではあるが、實際に於て機會はさう度々來るものではない。今回の震災は未曾有の悲慘事であつたに相違ないが、而かも之を大與の大正維新と言ふことが出來やう。日本の文化も更に此所から出直さねばならぬやうに、國民生活も亦此處から新たに踏み出さねばならぬのである。其人々には甚だお氣の毒ではあるが、昨日まで富を誇れる人が、決して今日の富者ではないのである。或る程度まで昔日の富も力も、九月一日午前十一時四十八分と云ふ機會に於て抹殺し去られたのである。そして此時を一紀元として、新たに吾々の前に富と力の運命双六はふり出されたのである。吾々は此所を一歩として新らしき運命を開拓せねばならぬのである。成功の道黃金の山は誰の眠の前にも横たはつてゐるのである。今日の場合は過去の追憶に泣き、現在の不遇に悶ゆるの折りではない、御勅語にもあつた「非常の秋に際しては非常の果斷なかる可からす」との御聖旨を奉體して、男子も女子も、嘗ては富める人も、貧しかりし人

も、今日を立脚點として此機會に乘じて成功のカギを攫むべしである。さらば何うしたなら、生活の安全地帶に入り、成功の巨星を逐ふて進むことが出來るか。それには人各々の趣味もあれば、持合せの懐工合もあることで、誰れ彼れなしに、今日は此商賣が一番に儲かるからと言つて勸めることは出來ぬ。そこで東京、殊に震災後に於ける東京で、これならば錐でも小資本で出來て、將來充分の發展も出來擴張もし得らるゝと云ふ職業數一種を選んで、以下追次之を紹介することにする。併しながら其記錄するところは一般的調査の結果に過ぎないのであるから、若し其一を選ばんとする場合には更に運用上各自の考案を附加することが必要である。

金儲の鍵は何うすれば攫めるか

本會の調査報告に先き立つて今一つ、各人の注意を促しておきたいのは、今後の景氣は何うなるかと云ふことである。固より此問題は經濟上の重大懸案であつて、一寸手輕に論斷することは甚だ至難ではあるが、尠くとも今後四五年間の東京及び横濱には、通貨が流動して、中流以下殊に勞働階級の懐合は好景氣であると云ふことが出來る。であるから此際商賣を開始するものは、其目標を此所に置く要がある。換言すれば高向きよりは民衆的、大取りよりは小取りで積上げて行くと云ふ方針を取ることである。政府としても成る可く通貨の膨張を防ぐために種々の方法を講ずるであらうが、却々長い間に培はれた、實越の錢は遺はぬと云ふ勞働者氣質は、遽かに取り去られるものでないから、當分金使ひの荒い、景氣の好い連中は是等の勞働階級と見なければならぬ。それだけに此連中を第一の華客とする商賣を始めることが、資本も少なく、且つ利益もあるものと云はねばならぬ。併し前にも言つたやうに、人一倍の成功を贏ち得んとするには、本會の調査を基礎として、其處に何等かの考案を加味することが必要である。「あの商店が繁昌するから、あの商賣をやつて見やう」と云ふやうな平凡の考へを持つてゐては駄目だ。何んの商賣でも、何んの職業でも、他に優る何物かの考案と努力が發展の基礎なのである。

其鍵は本書の中に轉がつて居る

一體人間は極めて身勝手なもので、窮したり困つたりすると、日頃は振向いても見ない神樣や佛樣を頼んで見たり、自分で自分の事を決斷することが出來ないで、御闘を引いたり、易者に見て貰つたりするが是れは實際馬鹿氣切つた話で、只自分の意久地なさと、決心のにぶい事を表白するまでのことで、其境遇を轉回し、運命を開拓する上に何等効果がないばかりか、却つて其依頼的迷信は、進路を閉ぎ、機會を逸する恐れあるものである。此頃地震成金の中に某々寺院が數へられたり、大道易者が擧げられたりしてゐることは、我が國民が如何にも低級であり、自立獨行の信念に乏しいことを語るもので、甚だ殘念な譯である。斯んな風では失職者は失職者として何時までも新生涯に入ることは不可能である。自分の運命を開拓する者は自分より他には無いので あるから、窮すれば窮するほど、更に勇猛心を奮ひ起して西哲の所謂「求めよ然らば與へられん、叩けよ然らば開かれん」との金條によつて、境遇の轉回を圖ることが必要である。そこで大勇猛心を以て、武士は食はねど高楊子的虚榮心を捨て、何んでも可い出來る限りの努力を盡して第二の運命を開拓しやうとの決心がついたら、其職業を選擇する前にあたつて先づ左の箇條、

一、自分の體質と趣味

一、全家族でやるか、又は家族の一部でやるか

一、資本として何程までの金を投ずることが出來るか

一、營業場所の周圍

等について確定を與へ、調査研究を遂げた後に、本書の各項を精讀して行つたなら、其處に何等かのヒントを見出すことが出來る。若しヒントを得たとすれば、即ち成功のカギは自分の手に攫めた譯である、併しカギを攫むだばかりでは黄金の大金庫は開くものではない。開く迄には更に大なる努力と健闘を要するのは無論のことで、換言すれば本書は金儲のヒントを與へる一指針である。此處に金儲のカギを納めた大寶庫には精巧な錠前も施してあれば、暗號の設けもある、決して本書を讀んだからとて、棚の牡丹餅が開い口に落ち

ても來ねば、金儲の罪が一手にギイーと開く氣遣はない、此點は讀む者が誤解しないやうに、つまり成功も金儲も各自の努力の他には何にも無いのであるから……。

獨りて簡易に出來る金儲法（一）

前にも言つたやうに、商賣に貴賤なく勞働は神聖であるから、昨日までは立流な大商店の主人であつたにもせよ、或は官廳會社の高級吏員であり社員であつたにせよ一朝財産を亡ひ、職を離れた以上時と時節である。活きる爲には何んな職業でもやらなければならぬ此場合職業の種類を選り好みをして機會を逸するが如きは、決して策の上なるものではない。身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もある諺への如く大に奮發してやる可しだ。先づ順序として自分だけ一個で直ちに其日からでも始められる職業から紹介して見ると

▲繪ハガキ賣　これは震災が生んだ際物師的の商賣ではあるが、此場合四五日の小資本で、直ぐ其日から多少の利益が得られるばかりでなく、髭があつても、洋服を着てゐるしも、又婦人でもやれる商賣であるから、一時方針の定まるまでの間やつて見ても惡くはないと思ふ。繪ハガキにも上中下があつて値段は一定してゐないが、大約六割强の利益があるものと見れば間違ひはないであるから一日に若し五圓の繪ハガキを賣ることが出來たとすれば三圓乃至三圓五十錢の利益は得られる譯である。今或る製造販賣店について問ひ合せたところに依ると

繪ハガキ一枚に付き
一廿錢賣のもの元價九錢
一五錢賣のもの同　二錢
一二錢賣のもの同　七厘

斯んな割合になつてゐる。此仕事は今では罹災ハガキのみを扱つてゐるから、際物師的の商賣ではあるが、發賣所側では今後「復興の東京」であるとか「皇太子御成婚紀念」とか云ふたやうな種類のものを引續き發行して、販賣人には手を明かせないとは云つてゐるが兎に角際物師的の商賣としても、其賣行の點から見て、春先きか秋晴れ時の商賣であつて、冬寒には見込がないと思ふ。

▲月後れ雜誌の行商　これも男女いづれでもやれる商賣で、高尚と綺麗な點は前者と同樣あるが、前者の際物的なるに比して、後者は永續的のものである。此行商は今度が新たに獨設したものであつて未だ何人も氣附かぬところである月後れ雜誌と云ふと、雜誌の發行所が全國の各書籍店に依託して販賣させた賣り殘りの雜誌のことであつて、書屋仲間では一名これを返品物と云ふのである。例へば正月號の賣り殘りの雜誌が三月の五日までに全部、賣捌店から發行所へ返品となつて戻つて來る。それを發行所が更に返品物專門の店に普通九掛（一割引の事）で賣る物を、三掛四掛ぐらいで、賣れ殘り全部を賣渡して了ふのである。それが即ち月後れ雜誌として再び市場に現れるのである。月後れ雜誌は古本ではなく新らしい本ではあるが、只正月號が三月の中旬から市場に出るのであるから、發行の月から見て二ヶ月後れてゐるから、月後れの名がある所以である。其所で此月後れ雜誌は、今までにも店頭で賣さばいてゐる店は澤山あるが之を行商したものはない。所が震災後の今日多少讀書趣味のあるものは、藏書は燒くし、新刊書は高しと云つた工合で、讀書慾はあつてもそれを滿すことが出來ないので困つてゐるのであるから其讀書慾に乘じて、此月後れ雜誌を一抱へも抱へて多バラック廻りをやれば、相當の成績はあがると思ふのである。そして其持つて廻る種類は餘り六ヶ敷い物よりも、文藝、娯樂、婦人、子供向きの物がよからう、此方は繪ハガキに比べると利益は少なく三割か四割止りであるが、「此次の號が出たらネー」と云つたやうに、引續きの顧客も出來るから、一二三ヶ月もやれば案外容易に商賣を續けて行くことが出來やう。資本は二十圓もあれば充分で、當人の努力にもよるが一日三圓位の收入を得ることは餘り難事ではないのである。

▲納豆賣　是れは前二者にくらべると聊か卑た商賣のやうではあるが、働く時間の短かい割りに、利益が多く得らるゝと云ふ特典がある。一代の大富豪村井吉兵衛君は、嘗つて斯んな事を言つてゐる「金儲をするには、直に消耗する商品を商ふに限る。如何に信用を得ても、一時に多く儲つても、一年に一個、二年に一個と云ふものでは駄目だ」と。なる程彼が空拳から僅かに三年にして二十萬圓の富を積み、十年にして六百萬圓の

金を儲け得たのは、立ごころに烟りごなつて消ゆるヒーロー、サンライス等の煙草を商つたからで、若し是等のヒーローごがサンライスごかが、一個買へば一年も二年も用をなすものであつたなら、如何に村井吉兵衛君の商才を以てするも十年にして六百萬圓の富は贏ち得られなかつたらう。引證が甚だ大き過ぎるやうではあるが、納豆も其日直に消化されて了ふものであるばかりでなく、納豆は江戸趣味を代表する食物であつて、苟も一年以上の生活を東京に續けた家庭には、朝の味噌汁ご共に一種の常食ごして、二日目乃至三日目には必ず膳に上せらるゝのであるから、其販賣の廣いこゞ、購買力の多いこゞは驚くばかりある。で若し現在行はれてゐる行商法或は行商人その者に感服の出來ない點があれば、更らに之れを文化的に現代的に、やつたならば一般家庭から歡迎を受けるばかりでなく、充分の利得を納めることが出來るこ信ずる。今日の納豆賣の卸値段は五錢賣り一個二錢六厘であるから、一個賣つても二錢四厘、即ち五割弱の利益があるこゞになつて居るのである。

獨りて簡易に出來る金儲法（二）

前章に紹介した分は、獨りごこ云へば本當に只の獨りぼつちで、下宿屋の二階からでもコツソリごこ飛び出してやれるものであつたが、此處に紹介する分は、多少の道具建てもいれば、人手も要するのであるが、それごて極く簡單なもので、屋臺にナベが一つ、人手なら一日に一二時間もあればよいのである。元手は屋臺の賃貸物さへあれば二十圓から三十圓までゞ充分にやれるのである。

▲おでん屋　おでん屋ごこ云へば元祿時代からある商賣で、今の新らしがり屋に言はせれば、或は今更らおでん屋でもあるまいごこ罵るかも知れぬが、其實健實な、なかなか面白い商賣である。資本ごこ云へば屋臺ごこ銅のナベであるが、屋臺は三の輪から千住方面に行けば賃貸物がある。損料は一晩が十五錢から二十錢くらいなもので銅のおでんナベは十八圓位から五圓ぐらいの安物もあるが、元手の都合さへつけば上物を買つておくこゞである。毎日の仕入は賣れ行きにも由るが、五六圓程度のもので、利

益は折れて曲るこ云ふから、六割は確かにある。それで此商賣の成敗の分るゝこころは、屋臺を構へる場所である餘り人通りの多いこころや明るい處は駄目で、小暗いやうな淋しいこころに限る。そして一番に繁昌する時刻は夜の十時から十一時、十二時、朝の一時、二時ごこ云ふこころである。此商賣の附きものである酒ごこ茶めしは是非おく必要がある。それは大抵の客が夕飯を濟してから用達しに出かけた戻り、又は寄席、活動なごの歸りが多いから、晩酌はさめてゐるし、腹も聊か北山ごこ來てゐるのであるから、先づおでんの一ツ二ツ食ふこ、屹度「おい一合」ごか「御飯を一杯」ごか言ひ出すのである。此場合に「お相憎くさま」ごこ、やるこ思ふ半分も食はずに行つて仕舞ふ。であるから、酒ごこ御飯の準備は是非必要である。若し一晩に材料七圓を賣り盡くすごすれば、其上り高は十五圓位ひになるから獨りごこ云つても二人三人の家内には大丈夫である。

▲屋臺バー　前者ごこ同じやうな夜商賣ではあるが、多少趣きの變つてゐる點もある。それから之れは前者に比べて西洋料理を造ることを知らねばならぬが、それごてカツレツ、シチユー、コロツケ、カレイライス位ひのこころを心得てゐればよいのであるから、氣の利いた者には料理法の小冊誌を讀んだゞけでも出來る。これは銅の鍋の不用なかわりに、フライ盤が二個、食皿が一ダース半、ナイフごフオークが半ダース位ひは要る。此他には大小カツプが取交ぜて十個もあれば澤山で、其實入は

一金一圓六十錢　フライ盤
一金三圓五十錢　食ザラ
一金二圓　ナイフフオーク
一金一圓二十錢　カツプ
一金二圓五十錢肉きりナイフ
合計金拾二圓八十錢

毎日の材料仕入は其時の都合ごして、利益は三割止りごこ見るが至當で、其上に利益があるごすれば少しボリ過ぎてある。此方はおでん屋に比べて金高が上るから、一晩の利益高ごしては見たりがたく弟たり難いものであらう。紺の筒ソデ姿よりは、白いコック服の方がハイカラごこ思ふ者は、屋臺バーの方もやる可しである。

▲不景氣知らず　これは京都にある「けんなほし」から思ひ着いた新考案であつて、名稱は假りに附

したものであるが、今日の燒野原の東京には最もふさはしい商賣であらうと思ふ。それは何にかと云へば酒のカスの汁、所謂カス汁を賣るのである。東京の人は餘り此汁を家庭の食膳に上せないが、關西地方では冬になると御馳走の部に數へて、毎日のやうに賞味してゐるのである。其作り方は酒のカスを一度當りバチに入れて、味噌汁を作るやうに作るのであるが、味附けには魚肉か牛肉を入れて、身は葱に大根、人參を取交るのである。京都の冬の夜には、七條河岸、四條の川端なぞに此屋臺が並んで、盛んに客を呼んでゐるが、實際吹き上げる川風に身慄ひしながら、屋臺に駆け込んで、此の「けんなほし」を引掛ける味は又別段である。味噌汁のやうにクドクないから、此汁ばかり飲むのであるが、一二杯も飲むと、確かに全身に温まりの廻るのが解る。であるから此寒空に向つて、バラックに住む人や燒野の原を往き來う人に取つては此上もない飲み物であると思ふ。「けんなほし」とは東京語では景氣直しといふ意味であるから、其處は適宜に「景氣汁」といつてもよし「人氣汁」と名附けてもよいと思ふ。資本としては屋臺の他には鐵鍋が一個と、吸物椀が十個もあれば足るのであるから極めて準備は簡單である。一椀の賣値を五錢として、優に五割の利益はある。只多少此商賣の上に難事とも見るべきは、カス汁そのものを一般に知らしめると云ふことであるが、さまでの事でもあるまいから茲にお勸めをする。

一〇 獨りて簡易に出來る金儲法（三）

簡易に着手し得らるゝ職業としては、牛乳、新聞等の配達もあれば、料理屋の出前持、西洋料理店のコックもあり、屋外勞働の手傳等もあるが、これは其人々の體質とも深い交渉があり、且は本書が研究の主眼としてゐる「如何にすれば金儲が出來るか」と云ふ儲けると云ふことよりは、單に今日を無事に過し得らるゝと云ふだけであるから、此種の紹介は暫く措いて、其職業に從事して、相當の努力さへすれば、發展の見込もあり收入の增ゐる望みもある、所謂金儲の出來ると云ふ職業を今少しく紹介して見る。前二章に於て、行商を意味するものと、大道商人としての內容の一斑を紹介しておいたから、本章では最も將來に望みのある外交の仕事の二三を採錄する事とする。

▲廣告勸誘の外交　廣告とは新聞なり雜誌なりに掲載する廣告のことで、其勸誘員には各發行本社に屬する者と、廣告取扱店に屬する者との二種があるが、仕事の方法としては同一である。發行本社に屬する者は、其社の發行物のみに掲載廣告を勸誘するのであるが、取扱店員となれば全國の新聞なり雜誌なりへ廣告の掲載方を勸誘するのであるから、一軒の得意で數十種の掲載方を依頼されることがある。故に前者に比べると後者の方が收入は多いことゝなる。併し後者に同業者の競爭もあれば、何處までも商人風で腰を低く行かねばならぬが、前者の方は新聞社なり、雜誌社なりの信用と勢力を背景として勸誘するのであるから、後者に比べて勸誘は甚だ容易な點がある。兩者共に餘り見苦しくない背廣服が一着あれば、誰れにも出來る仕事である。孰れも最初は電車代として三十圓乃至五十圓まで位ひを支給して呉れるに過ぎないが、其他勸誘の割戻しがある。是れは其社なり其店なりに依つて種々な規定が設けられてゐるが。先づ千圓だけの廣告の勸誘したとすれば其金額の五歩、五十圓は勸誘員に割戻して呉れる。であるから一年もやつてゐて多少腕のある者は、一ヶ月に五百圓も八百圓もの割戻金を貰つてゐる。それに文明商人の一大武器として新聞雜誌の廣告が認められるやうになつた今日では、勸誘もあまり骨は折れず無產知識階級者の仕事としては此上もない仕事である。

▲貯金勸誘の外交　これは据置貯金、公債勸業債券の割賦販賣、無盡會社の會員等の募集勸誘であつて、前者の得意が多く大商店とか銀行會社であるに反し、此の方の勸誘先きは中產以下の小商人小月給取、職人、職工である。此仕事も其所屬の銀行なり會社なりの基礎が確實なもので、社會にさへ信用があれば決して六ケ敷い職業ではない。更に仕事の內容を今少しく碎いて說明して見ると、据置貯金とは、三年なり五年なりの間、毎月何程かを貯金することを勸誘するので、勸誘される者に取つても決して惡いことではない此種の銀行で最も信用のあるものは不動

貯蓄銀行、あかぢ財蓄銀行、帝國實業貯蓄銀行などである。又公債や勸業債券の割賦販賣と云ふのは政府が發行してゐる公債證書、日本勸業銀行の勸業債券、貯蓄債券を、一年なり三年なりの間毎月幾分づゝかけ金をさせて、滿期になれば百圓なり五百圓なりの公債や債券を加入者に渡すのである此種の會社では帝國公債株式會社、日本國債株式會社、勸業債券月報社大塚債券合名會社などが信用を博してゐる。それから無盡であるが之れは百名を一組として三百圓、五百圓、千圓と云つた風な金を、其組合員が毎月一回又は二回少しづゝかけ金をして、一ヶ年位ひで拂込濟となるやうにして其金を受取るのであるが、無盡の特色は其期間内でも或る方法によれば其全額が融通の出來ることである。故に社會の一部では之を庶民金融機關の一つに數へてゐる。此種の會社では帝國無盡株式會社、大和無盡株式會社などが有名な方である其處で此等の勸誘員となればその位ひの收入があるかと云ふに、最初手當が五十圓見當、金額百圓に對する勸誘手數料が一圓五十錢から三圓はある。であるから少し馬力をかけて働く者は二百圓内外の收入を得ることは餘り難事ではないとしてある。

▲建築ブローカー　建築の中請と云ふものは在來もないではなかつたが、焦土の東京にあつては、缺くべからざる一職業として擡頭して來たのである。バラックの建築を目して復興氣分などゝ、新聞紙は旺にあはりを掛けてゐるが、これでも未だバラック建てさへ數へるほどしか出來てゐない。勿論本建築を志してゐる者は。復興院の計畫發表を待つてゐるであらうが兎に角此所五年乃至十年の東京及び横濱の兩都は、建築業者の天地と云ふことが出來る。此意味から見て建築ブローカーは最も面白い愉快な仕事であつて、あはよくば一躍紀文が昔日の壘を摩することも出來る。從來の建築の中請と云へば一種の千三屋的仕事に數へられてゐたが、今日では決して左樣ではない。右も左も、前も後も、東京全市到る處建築の必要に迫れてゐるのであるから、此際暴利を目的とせず、親切を專一として仲介の事に當つたならば、千に三つでなく千が千ながら交沙が出來ることは請合ひである。建築のことたゞブラ〳〵燒

たる歐風あり、日本式あり、大小又一ならざるを以て、單に利益の程が豫測し得られざるばかりでなく、素人にあつては大體その見積さへ出來ないのである。併し此ブローカーは橋渡しと云つたやうなもので、自分に見積は出來なくとも、建築をしやうと云ふ者と、建築業者とを引合せて、相互の間に値段の折合が出來て、手を打つてさへ仕舞へば、當然總金額の何歩ことゝ云ふ報酬が這入るのであるから別段値段に關する知識はなくとも誰れでもやれるのである只此仕事の具体要件としては多少の知已がなければならぬことである。そして其知己は自分では新建築をする必要はなくとも、必要のある者に紹介して與れるし、紹介を受けた甲は更に乙に紹介して與れると云ふ緣故がないと、たゞブラ〳〵燒野原を歩き廻つたからつて、建築の注文が轉がつてゐる譯でないから、此職業に從事しやうとする者は、先づ此點を省慮してから後に取り掛ることである。

▲保險の勸誘外交　此他にも保險の外交員など有望なものもあるが今日の經濟狀態では當分充分の活動も出來まい思ふから、詳細の紹介は預つておく。

婦人の纖手にも
この富の力（一）

婦人は家の奥に引籠つて、ノラの言分ではないが人形のやうに、美しく化粧でもして、妻から母へと平凡な、活氣のない生活さへ續けてゐれば、賢婦人であつた世の中は既に昔である。今日の世の中は男も女も働かねば食はれぬ。恐らく先祖からの遺産でもない家庭では、亭主獨りの稼ぎで、高い家賃を拂ひ、高い物價の間にスイート、ホームとばかり澄してゐることは出來ぬ。いかに戀愛が至上主義者でも、食はずにゐては愛の享樂に耽る勇氣もあるまい。つまりは文明の新潮流によつて、日本の過去に於ける平和な家族制度は押流された譯である。それが善いか惡いかは、自から別箇の問題であつて、今茲に彼れ是れ論ずるの必要はない。今は曾だ婦人も最早安閑として家の奥にばかり引込むでばかりゐる時代ではない。殊に今度の變災のやうに非常の秋の後に於てをやである。家庭と云ふものゝ、調和を素さゞる範圍、婦人と云ふものゝ、生命を傷つけざる程

度に於て、須からく社會に乘り出して何等かの職業を求むべしである。そして大に働けて、一家の和氣、家庭永遠の平和と團欒の基礎を造るべしである。

▲子供服裁縫　裁縫と云へば婦人の心得ふべき仕事の一つであつて大抵の婦人で和服の一通り裁縫の出來ぬ人はないやうであるが、それでも「御仕立物」とか「御裁縫服」とか云ふ看板を出せば相當の收入はあるのである。けれども夫れは所謂內職であつて、職業としては決して有望なものではない、ところが昨年あたりから時代の新傾向とでも云ふのか、一般家庭を始め諸學校でも男の兒は勿論、女の兒にも洋服を着させるやうになつて來た。其結果子供服の裁縫が新らしい婦人の職業として現れたのである。但し子供服と一口に云ふが女兒用のもので、男兒用は矢張り專門の洋服屋で裁縫してゐるのである。其處で此子供服の裁縫は極めて簡易なもので、多少ミシンの心得のある者なら、一ケ月も練習すれば大抵の形は自分で裁斷して縫ひ上げられるのであるから、家庭の仕事の片手間でも二ケ月とか、らず覺え上げることが出來るのである。それに子供服の流行と云ふことは一時的の傾向ではなく生活改善に出發したもので、現に震災後の建築についても、從來の如き二重生活的構造を排して、文化生活に適する構造をこの呼び聲もあるぐらいであるから、子供服の需要は日一日と增加して行くことは不動の事柄であると共に、今後の婦人は其人妻たると處女たるを問はず、家庭を離れて職業に就くことも爭はれぬ大勢であるから家庭の仕事も自然分業的になつて子供の着物の裁縫の如きものを專門の者に委して自分は自分の職業に勵むと云ふことになるのは當然の歸結であるから、此子供服裁縫と云ふ職業は今後最も有望の仕事である。それで裁斷して縫上げるに何程の時間を要するかと云ふに冬物で一日に二着、夏物なれば、四着乃至五着、はそれほど骨は折れないさうである。偖て其裁縫賃はと云ふに冬物は下等品で二圓から三圓、夏物は八十錢から一圓廿錢位ひであるから、一日四圓內外の收入にはなる譯である。編者は新時代の職業として特にこれを一般の婦人に勸めたいと思ふものである。

▲美容術　是れは多少の資金は要するが文明的の職業でもあり、婦人には最もふさはしい仕事であると思ふ。美容術には結髮、化粧、着附の三技巧が伴はなければならないのであるから、到底一朝一夕に自分獨りで覺えることは出來ないから、或る部分は其道の者を雇入れて始めるのである。美容と云ふことは婦人の傳統的慾求であるから、此點について趣味を持たない婦人は一人もないのである。

そこで其趣味のあるところを一層向上せしめ更に研究を重ねて、それに自分の技巧を加へて行つたなら、結髮は別として、化粧や着附は難なくできる筈である。若し自分で化粧と着附が受持つてるとすれば、他は結髮であるから髮結を一人雇入るれば、立派に美容館を開業することが出來るのである美容館の純外國式なものを作れば多額の資金を要するが、未だ〳〵全般の上から見て、お客は日本式の者が多いのであるから、さう費用をかける必要もない。室內裝飾費に五百圓もかければ充分であるそして料金も尤も平民的に一つの技術について金一圓位にすれば、髮を結つて貰つて、化粧をして貰つて、其上衣裳の着附までして貰つて合計三圓で濟むのであるから中流ごころの婦人は歡んで集つて來ることゝなる。現在ある四五の美容館の如きは單に婦人の虛榮心を挑發し煽動する一機關であつて決して眞に婦人の美容を善導するものではない。此故に彼等の如く一施術について三圓五圓と云ふが如き料金を取らないで、所謂民衆的美容館を經營して行つたなら、婦人の獨立職業として充分の成績が得られることゝ思ふ。

▲毛糸の編物　これは昨年末頃から復活して來た婦人職業の一つであるが、前途あるものゝ一つに數へることが出來る。嘗て編物が流行した時代は家庭に於ける子女の手藝の一課としてもあつたが、今度の復活は職業的に底力あるもので、ジャケツに、腹卷に、靴下に其他種々な方面に需要はあるが、矢張第一位を占むるものはチャケツである。昨今ジャケツ一枚の編上げ工賃は二圓五十錢ぐらいなものであるが、達者な婦人なれば十四時間ぐらいで編み終るさうであるから、婦人の稼ぎとしては決して少くない方ではない。それに技術も二三日で覺えられるし、仕事

は綺麗であり、純女性的であるから、一家の主婦なさには、最も適當な仕事である。若し之れに一歩を進めて職業的にやらうとすれば毛絲の仕入資金を投して、五名でも十名でもの編方を募集して、其出來上り品を自分の編上品を一時に問屋に納めるやうにすれば、一枚について自分の工料には及ばぬまでも、一割なり二割なりの利益を見ることが出來るから、優に一ケ月百五十圓乃至二百圓の收入を見ることが出來るのであるから、婦人の優しい、眞白な、なよやかな手も、其利用によつては驚くべき富の力を持つてゐるのである。

以上紹介した處は、尤も時代的なものであるが、以下少しく外交的なものを紹介する。

婦人の纖手から
この富の力（二）

婦人が家庭を離れての職業には必ず惑誘と墮落が伴ふてゐると云ふものがある。編者も亦過去の實跡から考證して、絶對に之れを否認するものではない。けれども夫れは職業の罪ではない、人の罪である。只家庭にあるよりは異性に接するの機會が多いために、眞操の價値を知らない、多情多淫のやからが、或は誘惑され、或は誘惑して、遂に墮落の淵に陷るのである。斯くの如き婦人は、出でゝ異性に接せざるまでも、家庭にあつても其機會さへあれば、何時でも墮落すべき性情を持つてゐるのである。世間たまく〳〵斯くの如き婦人あるを以て、婦人の外交的職業を呪ふのは大なる間違である。要は職業に就く婦人そのものゝ眞操觀念にあるのである。

▲集金人　曾蜀山人は「取次を娘にされて掛取が斷りらしき金の催促」と云ふ一首を詠んでゐるが、實際婦人は何處やらに一種のやわらか味があつて、斯んな場合には極めて重寶なものである。即ち此の蜀山人の狂歌の轉回したものが女集金人である。銀行會社を始め各種の方面でも、女の集金人を欲しがつてゐるやうであるが、餘り志願者がない。それには何にも深い理由があるのではなく、只「きまりが悪い」と云ふ小さな虚榮に過ぎないのである或る意味からいへば決して無理のないことではあるが、假にも生活の安定を得やうとてし職に就かふとの決心をした

以上、きまりが悪いなゝ云ふことは絶對の禁物である。殊に集金といふ仕事は、決して卑しい仕事でもなければ、身分にかゝはるやうな職業ではないのである。其所で收入は何うなるかと云へば、女集金人の例は不明であるが、一般の集金人の例から見て、會社なり商店なりに依つて多少の相違はあるが、月給は先づ五六十圓程度であつて、其他集金一口宛いくらと云ふ手數料があるから、一ケ月百圓内外の收入はあるものと見ることができる。婦人の新職業としては寧ろ上の上なるものと云へやうと思ふ。

▲家政婦　これも最近起つた婦人の新職業である。之れは看護婦のやうに經驗もいらねば、其道の學問を修める必要もなく、その日から直ぐ働らけるのである。何々看護婦會と云つたやうに、家政婦の仲介を目的とする何々家政婦會と云ふのがあるから、其所へ行きさへすれば口は見附けて呉る。尤も此種の會の中には、内容に就いて怪しいのがあるから充分調べてから申込む必要がある。家政婦は其名の示すやうに、家庭の仕事を手傳ふのであるから、仕事としては一定してゐないが、大抵老人の世話とか、産婦の世話とか、洗ひ物縫ひ物の整理などである。そして家政婦は大抵通ひで、朝の七時ぐらひから、日暮れまで勤めればよいことになつてゐる。尤も先方の都合で泊込を希望する家もあるさうだが、それは雇はれる方にも都合もあるから、都合で泊込は斷つても可いのである。給料は一般に日給になつてゐて一日が普通一圓五十錢から二圓五十錢止りである言ふまでもなく口は三食とも向ふ持で、湯錢も出ることになつてゐる。であるから使ひさへしなければ給料は全部殘る譯であるから、婦人の職業として決して割りの悪い方ではない。併し此職に就かうとする者には或る程度までの、健實の意志の必要がある。それは産婦の家などに雇はれた場合、折りに脱越的な主人があつて非常識の誘惑を試むることがないとも限らぬ。かうした際、自分の眞操を確守し得るの意志を缺いたものは、絶對に家政婦などに、なるのは危險である。

▲筆耕　筆耕には種々の種類があるが、少し綺麗に字を書き得るものは誰れでもやれる。筆耕には原

稿の寫し、封筒、ハガキの各宛書き、雜誌や書籍の帶封書きなどが其重な部類である。仕事は大抵の場合自分の宅に持つて歸つてやるのであるが、時には注文先きに出張して書くこともある。出張の場合は一時間いくらと云ふことになつてゐるが、普通の筆耕物は一枚いくらとなつてゐる。

筆耕料の大略

一半紙版一枚　四錢位
一封筒一枚ペン書　二厘位
一同　筆書　二厘五毛
一ハガキ一枚二種共　同上
一帶封一枚ペン書　一厘八毛

普通の者で、一日に半紙版もので五十枚から七十枚、其他の物は千枚ぐらひは平氣で書けるさうであるから、一日の收入額を二圓ぐらいと思へば大差はないのである。

此他謄寫版印刷とか、タイプライタティング等の仕事もあるが、是等は多少の練習を要して、誰れにでも直ぐやれると云ふものでないから、其紹介を省略して置く

婦人の織手から
この富の力（三）

婦人としての手工的な仕事、婦人としての外交的な職業、この兩種については、既に五六調査の結果を發表しておいたのであるから本章には婦人として最も手輕にできる商賣の二三を紹介して見やうと思ふ。尙ほ各章に收めた他にもカフエーの女ボーイであるとか、活動寫眞館の手引、料理店の仲居と云つた種類のものがあるが、それは職業には違ひないが、決して勸むべきものではない。寧ろ成らうとする者があつたなら編者は、絶對に其不心得を諭さうと思ふ。殊に此種の職業の要求する婦人は社會味を知り得た中年の婦人ではなく、所謂青春の乙女である。其所に危險の伴ふのは、敢て心理學者や慾性研究者の說明を待つまでもないことである。此故に編者は此種の紹介を省くと共に、如何に生活に追はれ、其日に窮すると雖も、各人が相戒めて此種の職業を選ぶことなきを、切望してやまないものである。

▲化粧品店　これは婦人の商賣としては申分のないもので、資本を掛ければ相當に要るが、婦人の獨りの仕事としては餘りに費用をかける必要はない。格子戸脇の四疊ぐらいの座敷を開放して、小さいガラス戸棚の三つも並べれば宜の

である。そして其周圍の裝飾に廣告ポスターでもあしらつて、人の眼をひくやうに多少意匠をこらすのである。商品も餘りいろ〳〵の種類を置かないで、本統の化粧品ばかりを商ふのである。土地柄にもよるが高價な舶來物などは覗かないで、極く一般的な白粉化粧水クリーム、石鹼、齒磨と云つた種類で充分である。店頭の感じさへよくば立派に儲けて行けることは請合である。化粧品の元價はいろ〳〵であつて廣告中のものとか、名の知れてゐない品物は掛けが廉いが、賣るのに骨が折れるから、それよりか儲けは少なくとも名の知れた御國とか、クラブとか、レートとか云つた種類のものを取扱つてゐれば間違はない。是等の著名な化粧品は大抵七半掛けであるから、利益は賣價の二割五歩である。十圓賣つて二圓五十錢が儲けとなるのであるから、婦人獨りで經營する店としては十五圓から二十圓も賣上げがあればよい譯である。編者の概算によると店の設備から、商品の仕入れまで一切で二百圓もかければ、可なりの化粧品店が出來て、立派に生活して行かれる。

▲五色揚け　五色揚けといへば誰れでも知つてゐる、野菜物を取り合せた油の揚げものであるか、何にも五色揚けと限らず、煮豆にしろ、一家の副食物にしろ、煮しめにしろ、一家の副食物となる手輕で、安く商へる店を開くことも、バラックの東京としては面白い仕事の一つである。從來とても無かつた商賣ではないが、從來のそれは餘りに不潔すぎて少し身分のある者は。欲しいと思つても手が出なかつた。それに此種の店は本所とか、淺草とかいつた處の、一種の下級民町に限られてゐたやうであるが。今日は日本橋區の眞中でも、京橋か神田でもよいと思ふ。成るべくバラック建の町を選んでさへ店開きをすれば、屹度相當の成績を見ることが出來る。そして此店の條件は、誰れが一見しても清潔に氣持ちよく出來てゐることである。材料の仕入は日々のことであるから、其相場は一定してゐないが、總體の上から見て、三割や三割半の利益を掛けても賣り難いやうなことはないと思ふ。であるから假に一日に十圓の賣上があるとすれば、一ケ月の純益が九十圓乃至百五圓となるから、小資本の婦人の仕事としては

悪くはない、殊に東京市民の此所三年や五年間は、本當の落着が出るものではないから、自然に煮炊をするより一走りこいつた風になるから、確かに面白い商賣と斷定することが出來る。

▲駄菓子屋　これはガラス蓋の本箱が六つばかりと、平瓶が三つばかり、他に仕入の元手が十圓もあればよいのであるから、商賣としては簡單中の最も簡單な部類であるそれにお客が子供相手と來てるるから氣樂も此上はないのである駄菓子屋といへば、腰の曲つたお婆さんの仕事のやうに思ふものもあるが、決して左樣ではない採算上から見て立派に生活し得らるゝ婦人向きの一商法である利益の割は一圓の賣上に對して三十三錢强になつてるる。此外に種々の玩具を置くのであるが、玩具は大抵折れになるといふから一圓に對し五十錢の利益がある譯けである。假りに一日に五圓の商いがあるとすれば、二圓當りの收入となるから資本と勞力から見て善い商賣といふことが出來る

若し百圓の資本があつたなら（一）

一圓の資本も其利用方法によつては、優に百万の富を積むことが出來るやうに。何千、何百萬圓の資本も、遣りやう一つで今度の地震のやうにガラ〳〵ビシヤンと行つて了ふのである。故に事業そのものゝ上から見て資本が必ずしも大切なものではない。これを經營して行く者の手腕そのものが一番大切なものではないこれを經營して行く者の手腕そのものが一番大切なのである。併しながら資本は事業に對する油である。此所に事業といふ立派な車があり、復た是れを曳く手腕家があつても、若し車に油をそゝがなかつたならば、その車は決して思ふやうには廻らないのである。であるから、事業と資本は之れを切り離して研究することは出來ぬが、然るも其成功と失敗の岐るゝところは、これを運用する者の手腕いかんにあるのは勿論のことである。本書は前數章に亘つて、男女の兩方面から獨りで出來る金儲の道を研究して來たから、今後は男たると女たるとを問はず、復た單獨的たると家族的なるに關はらず、假設の資本金を目標として、各種の事業につ思て其成功の道を辿つて見やうといふ。而して茲には百圓の資本を以て直に着手せらるゝもの數種を擧げて見ることゝする。

▲葉茶屋　葉茶屋と云つても、到底百圓や二百圓の小資本では一戸を張つて、銘茶の壺は並べることは出來ないのであるから、此所に云ふのはお茶の行商であるが、これも編者が調査したところを以てすると、番茶を限つて行商するのが、此場合尤も策の得た方法ではあるまいかと思ふ。先づ方法としては番茶の上中下、一斤に付き壹圓、八十錢、五十錢ぐらひの三種を限つて、一斤袋と半斤袋をつくつて、名入りの箱車に積むで、これを小僧に曳かせながら、自分は戸毎に註文を聞いて廻るのである銘茶になると山本園がいゝとか、豐岡園がいゝとか、三越、白木の に限るとかの註文も出るが、番茶にはそんな文句はないから、此方らが腰を低く根氣よく廻つて行けば、何時かは「一度取つて見ませうか」と女中が口をきるか、又は妻君が「一遍買つて御覽」と命令を下すやうになる。さうなれば締めたもので、其の家がお得意になるばかりでなく、その隣りに行つても「お隣樣にも願ひましたから是非お宅樣でもお試めしを願ひます」と云へる。そのうちに最初の家が二度目に買つて呉れる頃までには、屹度その隣の家も買つて呉れるものである。始めには大抵半斤位か買はぬが、二度目からは一斤買つて呉れるやうになる。是が商賣の面白いところである。偖て開業費用の品目はと云ふに、ペンキ塗箱車一臺が四十五圓見當、印半綱二枚が七圓、殘額四十八圓が番茶の仕入である。お茶は大體に於て儲けのボロいものであるが、番茶は取分けて利益が多いのであるから、賣價の半分は儲かる。すれば一日に上中下取り合せて二十斤の茶をさばけば、一ヶ月の純益金が二百圓近くになる。百圓の資本で一ヶ月二百圓近くの利益と云へばウマ過ぎるやうではあるが、其處に大なる努力と勤勉が伴ふだけに、決して奇績的な儲ではないのである。

▲名刺印刷　これは一寸組版の技巧を要することは要するが、それも少し器用な者なら、自我流でも充分にやつて行ける。以前は交際場裡の名士のみの專用品のやうに思はれてるた名刺も、今日では猫も杓子も之を携帶してをらぬもの

はない。それに以前は百枚に付き上物で五六十錢、並物になると十五錢位ひからあつたが、用紙の暴騰と相待つて、使用者が贅澤になつて來たから一圓以下の名刺の注文はあまりなさうである。これと開業早々から店に座り込むでばかり居ては、思ふ程の注文もあるまいから紙の見本帳を懐にネヂ込むで、自分から注文取りに出掛けるのである。そして書取つた注文を夜の間に印刷して、それを納めながら亦注文を取つて廻るのである。一圓の名刺の注文に對して四十錢の利益は確かであるから、一日の内に十組宛も取れるやうになれば店は立派に成立して行く。創業費は印刷器械一臺が二十八圓見當、其他活字、罫集で五六圓かけて置いて、不足文字の出來た場合は其都度買入れゝばいゝのである。そして殘りの金で用紙の二千枚ぶりも仕入れておけば開業は出來る。それから注文取りに廻る紙の見本帳は用紙屋から立派なものを貰へる。若しそれを夫婦の共稼ぎ事業とすれば、主人が注文を取りに出たあとで、妻君が印刷の手助けをしながら、店の注文を受けるやうにすれば、能率も上るし收入の點にも餘程の向上があるものと云ふことが出來る。

▲安濃戸物　安いセトモノと云へば茶椀とかサラとか、小鉢とか土瓶とか云つたもので、それを手頃な手車に積むで、二十錢、十五錢、十錢、五錢と云つたやうに區分けをして、正札を附けて、先づバラック街を行商して廻るのである。入れ物と人手は有ればある丈け要るとか言つて、有れば有るほど重寶であるが、その代り少しぐらひの不足は心棒して、心棒の出來ないものではない。だから何にかの都合で或る品を使ふと思つて、無かつた場合は「今度出たら買つて來て置かふ」と考へても、其場さへ間に合へば、直ぐ忘れて仕舞ふものである。それを眼の前に運び出して行つたら、思ひ出して買つて與れるにきまつてゐる。また「わざ〳〵買ひに行くものはないが。坊のお茶椀の緣が碎れてゐるから一つ買つてやらう」と云つた風に品物を見れば不足を補ふとするのは人情である。但し此人情も時節柄値段が高くては駄目であるから安物に限る。資本は手車一臺と後は品物の仕入れであるから百圓までは要るまい。利益は仕入の上手と下手とにも由るが、賣値の半額は保證附きである。只一つ要心をようする事は、うか〳〵車を曳いてゐて石の上にひき上げたり、ヌカルミにひき込んだりして、ガチヤン、ガラ〳〵と品物を代無しにせぬ事だ。

若し百圓の資本が有つたなら(二)

▼銘酒屋　銘酒屋と言つても、其の昔淺草十二階下や千束町へんの怪しげな御神燈の蔭の、所謂銘酒屋と誤解されては困る。今編者が紹介しやうとするのは各國の銘酒ウイスキー、ブランデー、泡盛等の强烈な酒を商ふ、現代式の言葉を藉つて云へば、各國銘酒バーの經營法である。此は例の矢大臣式なもので銘酒のコップ賣り、一言にして盡せば神谷バーの出店のやうなものである。或る意味から見て此所數年間の東京は、印半纏着の東京であり、屋外勞働者の天下であるから、此仕事などは甚だ面白いと思ふ。小料理などは一切ぬきにして、いり豆か、新香の小皿を無代進呈として、各酒とも一コップ金十錢均一で商ふのである。小料理の二三品でもあると、客が長が引く憂ひがあるが、肴抜きでは大抵立飲みでグット引つ掛けて行くから、酔つ拂ひの出ることも尠なく、合ひ客同士に喧嘩の起るやうな厄介もないばかりでなく、販賣上の能率も非常にあがることゝなる。それから店構へであるが餘り立派では客が這入るのを躊躇する恐れもあるが、それかと云つて在來の縄暖簾のやうでも尙更らまづい。其所を粹でなく高尙でなくの俚諺に倣つて、聊か意匠を施すことが必要である。店構へによつて並の酒も上物に見ゑ、上物も並物にしか見ゑないのである。店構へと器物に多少の注意さへ拂つて置けば、酒の量が他の店に比べて少し位ひ尠くても、之れは彼の店よりは酒が良いと思つて飲むから、何んとも不平も出ず、寧ろ酒の味を賞めるやうになる。之れが人の心理を利用する處である。斯くする時は他店で三勺を十錢で賣るウイスキーを、二勺入のコップ一杯十錢で賣ることが出來るから利益の上に非常な相違がある。最近調査したところに由ると、ウイスキー、ブランデー、泡盛共に、一升の卸値段が一圓五十錢から一圓八十錢である。これを三勺入コ

多少一杯を十錢に賣るとすれば、一杯に對して五錢五厘の利益があることになる。資本の大部分は店構に消費して了つて、酒は各一二三升づゝもあれば、立派に開店することが出來るのである。

▲八百屋　これは店賣り、得意廻りと兩樣をやる必要がある。青物は魚と違つて、買出しには夫れ程の苦心はないが、取扱ひの上には余程注意をしないとビン〳〵してゐる葉を、わざ〳〵赤の葉にするやうな事があるそうである。けれども此點さへ注意すれば、素人でも今日が今、直ぐに取りかゝられる商賣である。八百屋としての呼吸は、相手が婦人であるだけに、優しく愛嬌のあることである。斯う言へば商賣として、愛嬌のいらない商賣はないと言ふ者があるかも知れぬが、愛嬌は特に此商賣には資本の一つと思はねばならぬ。假りに茲に卑近な一例を示せば、得意廻りをして「今日は何か御用は」と云つても、其八百屋が常にツンケンして不愛想であつたら、其所の妻君はフンあ奴かと云つた風で、品書きを問はず「今日はモウ出來てよ」と臺所拂ひを喰はすのである。更に甚だしきに至つては「何んつてツンケンした生け好かない八百屋でせう」と云つて其排斥問題は井戸端會議に提出されるのである。かうなつては如何に良い品物を、如何に安く賣らうとしても、最早駄目である。此反對に日頃優しく愛嬌を振り撒いておくと「あの八百屋の品は余り良くないのですが、何時もお世辭がいゝものですから」と云ふやうな事になる。何にもお世辭によつて惡い品物を賣附けようと云ふのではない。良い物を安く、得意から歡ばれながら賣ると云ふことが、特に此商賣の秘訣であることを說明して置くのである。資本は店拵へさへ出來て、買出の元手が三十圓も殘れば、荷車などは一時賃借をしても事を缺かぬ。利益は枯れ物や腐れ物さへださねば四割は固いのである。

▲雨傘店　これも店と云ふよりは商と云ふ方が適當であるかも知れぬ。是れ迄も雨傘は卜駄店及び製造者が小賣を兼ねてゐるのであるが。今編者の着想したところは、震災に伴ふ雨傘の缺乏と需要を充すべく、行商並びにバラック街に賣店を設けることである。今日までは男も女も、雨の日などは余り外に出なかつた。それは行く處もないし、行通の便を缺いてゐたからである。併し電車も全通するやうになり、各所にバラック建なり本建築なりが出來得るやうになると自然に外出の用事が增ねて來る今日は雨が降ると、雪が降ると云つて引込むでゐる譯にはならぬ。此際直ぐに感じるのは雨傘の必要である。あの地震の、際如何に落着いた者でも、雨傘まで持つて逃れた者は恐らく幾人もあるまい。であるから此需要に應ずべく雨傘の行商及び賣店を設けることは、震災後の仕事として目新らしい一つと信ずる。此際のことであるから蛇目の上物よりか、奴とか番傘とか云つた方が賣れ口は早い。百圓の元手があれば充分に繰廻しもつくしボラなくとも相當の儲けもあつて夫婦ぐらいの職業としては可なるものであると思ふ。

參百圓の資本金を投じたら（一）

小いさな商賣を始めるに當つて資本金が百圓であらうと、二百圓が三百圓であらうと、所謂五十步と百步との差で、其間に決して大差のあるべきものではない。只その設備なり規模なりの上に多少の相違が出來るまでゝある。それなれば何故こんな風に、資本的の區別を設けて職業の紹介をするかと云ふに、それは職を求むる人には有り勝ちな氣迷ひにたいして、一つの目安を示めさうとする手段に過ぎないのであるから、參百圓の元手でも紹介する仕事が百圓でゝも出來れば、百圓の元手として紹介したものに三百圓を投ずれば更に妙である。此點について讀む者が、百圓と云つたから百圓、三百圓と書いてあるから三百圓と云つたやうな不自由な考へを抱かないで、臨機應變に資本の增減を行つて貰ひたい。要するに本書の目的は、震災後に於ける東京でなすべき職業を紹介して、それに依つて職を求むる者に歸趨を敎へ、そして各自に此機會に乘じて金を儲けてもらへば善いのである。

▲ペンキ塗工　この仕事は自分で手を下すことは素人にはできぬ。けれど經營して行くことは誰にもできる。そして復興の東京色彩に最も有爲な仕事である。小さい事務所を持つて、塗料を買入れるだけの資本さへあれば職人は幾何でもある。それに請負ふた工事の都

合によつて職人の手も違ふのであるから、最初から職人を雇入れておく必要はない。素人が此仕事をやるについての第一の要件は請負金額の見積ができるかできないかと云ふことであるが、之れとて余り六ケ敷いことではない。一坪あたりについて塗料が幾何ほど要るか、普通の職人の一日の手間がいくらで、其能率は幾坪あたりと云ふ大凡その見當さへ心得ねてゐれば、誰にでも直ぐ見積を立てることができる。其上資本との關係もあるから此方も余り大きな工事には手もです、大きな工事になれば先方でも請負はしても呉れぬから余り氣骨も折れぬ。手始めの順序としてバラック建の小いさなもの、内塗りや外塗を請負ふのであるこれなら仕上りも早く、職人の手も鈍くて行くから尤も都合がよいばかりでなく、此位ひの仕事が一番に多いのである。ペンキ塗工の内には看板の製造もあるが、此方は騙けだし者には見積違ひの多く儲けも余り香ばしくないから、當分の間はバラック建の塗工專門に限る。其内には自然といろ〳〵の經驗もつむで來るし、金も貯つて來るから、事務所も擴張するし、工事にも手を擴げ、美術看板も始める事である。

▲メリヤス襯衣店　この店を持つには三百圓の資本は聊か心細いやうではあるが、そこが商賣の妙諦であつて遣りやう一つで何うにも遣り繰はつくのである。店は成る可く手狹な方がよい。そして客の標準を勞働者とするのである。表看板には極めて赤裸々に「きづ物に付き投賣」と云つたやうな文字を掲けて、販物（大阪出來）の油シミの着いたものや、縫ひそこない物、糸むら物を限つて賣りだすのである。これは冬物に限らず夏物も此調子でやるのである。すると何時となしに「あの店はキヅ物屋であるから値が安い」と云ふ評判が立つて、客足が增ねて來ることは請合である。不要なところに見榮をする者でさへなければ、襯衣に少しぐらいのキヅのあるは苦になるものではない。ましてシャツ一枚で泥まぶれになつて、終日働いてゐる勞働者においておやである。それに彼等は少し金廻りさへよければ、洗濯すると云ふやうな經濟的な頭は起さぬ。眞黑になつて汗の臭ひで鼻向けのならぬまでは着るが、かうなると捨てて仕

舞つてすぐ次を買ふのであるが、流石に彼等にも上物を買ふほどの勇氣もないから、安い物〳〵を求める結果は、時に競り屑のイカモノにひつ懸つたりするのである此んな狀態であるから若し安心して買ふことのできる、安物店があつたら屹度客は押し寄せるハである。兎に角幾十萬人と云ふ勞働者を抱擁しやうとしてゐる。帝都の復興事業の前には、斯うした階級を中心の商賣が繁昌もすれば、大いに儲かるのも爭はれぬ事であらう。

▲駄じる粉屋　駄汁粉屋とは汁粉であるとか、雜煮であるとか、大福餅、つけ燒餅こは飯と云つたやうなものを商ふのであるが、菓子にも駄菓子と云ふのがあるやうに同じ汁粉でも、盛澤山な所謂下層階級向きな汁粉屋を云ふのである

その昔は〻稚しる粉とも云つて、小僧や女中を唯一の華客としたものださうだが、震災後の東京では矢張り勞働階級者を目標に取つて商賣の遣り口を考へることが得策であると思ふ。勞働者の慾望は美眼でもなく美人でもなく實に飲むと食ふことにあるのだ。暇さへあれば食ふことを考へ、金さへあれば飲み廻るのである。彼等の多くは斗酒尙ほ辭せざるの辛黨であると同時に、百杯の汁粉を舌鼓一つで平らげるほどの甘黨であるから。勞働者相手に汁粉屋なんかと思ひ煩ふの必要は少しもない。晝食の代用にも太福餅をパクツクば、休憩時間の腹拵へにもしる粉をすゝるのである。駄じる粉屋繁昌の秘訣は餅のきれを大きくすることである。しる粉でも雜煮でもウンと大丼に盛り立てゝ、薄利多賣主義を信條とすることである。其代りに此商ひには世辭もいらぬば愛嬌の必要もない。只景氣よく其出這入りに「被入い」「何にを上げますか」「有難う御座い」と同じ言を繰返してゐればよいのである。此所の客の目的は甘ッたるいお世辭ではなく、腹さへ脹れゝばよいのである從來市内にあつた此種の商で一日に三俵の餅米を消化してゐたのは決して三軒や五軒ではなかつたのである。以て此商賣が如何に隆盛的可能性を持つてゐるかと云ふことが解る。

參百圓の資本金を投じたら（二）

▲木炭商　震災後火災におびゝ上

つた連中の口から、臺所の電化說が旺に唱へられてゐるやうであるが。偖て其實現は何時のことであるか知れたものではない。また近く各電燈會社に其處までの設備ができ得るものとしても、つまりが金の問題であるから第一に其恩澤に浴するのはブルジュア階級の家庭であつて、一般の臺所にまで行き渡るのは遠い將來の話である。それだけに一般の家庭では生活の必需品として、矢張木炭が重寶がられるのである。是れ迄にも薪はだん〳〵臺所から放逐される傾向があつたのに、今度の震災から家庭的には全く需要の影を斷つたと云ふことができる。從來は薪炭商と云つて、薪と木炭とを同時に取扱つたものであるが、以上の傾向から見て、編者は今後は木炭を販賣すればよいと思ふ。此商賣は諺に言ふ眞ッ黑になつて稼ぐ商賣ではあるが、利益は決して少くない方である。それに小資本でやるには人手もからず、夫婦共稼で充分に舞つて行けるから、經費も掛からず極く小ぢんまりとした職業である。そして一軒の得意が一ヶ月に二俵づゝ使ふものと見て、四五十軒の得意があれば、それを廻つてゐさへすれば充分に家計は立つて行くのである。炭も成るべく口を變へないやうに秋田物なら秋田物、信州なら信州ときめて取扱ふ方が一般の信用もあり、需要者の使ひ心地も變らないで善からうと思ふ。儲の程度は仕入の巧拙にも關係はあるが。三割以上と見て差支へはなからう。

▲ミルクホール　これは極めて手輕な小ぢんまりとした綺麗な營業である。それに客筋が半纏着よりか、洋服に羽織袴と云ふ方面であるから、其處にゆつたりとした氣分を見出すことができる。この商賣でも同じではあるが、殊に此のミルクホールを開くには營業場所を選擇することが第一の必要條件で、若し此の選擇を誤つたら、如何に資本をかけて、立派な店を出しても、遂には閑古鳥の啼く淋しさを招くかも知れぬ。要は得意となるべき人々の住まつてゐる周圍又は勤の人の群集し易い便利な地點、更らには左樣した人々の繁く往復する場所を選むことである。或る者はミルクホールの成功策として、店に一人なり二人なりの看板娘とか、美人の給仕なりを置くべしと說くものがあるが、之れは

甚だ間違つた所見であると思ふ。それもカフエーとかバーとかなら（カフエーに就ては別に意見を發表してゐるが）或は餘儀ない商業上の政策ともみることができるが僅かに一合かせいぜい二合の牛乳とカステラ一片のお客に對してまで、こんな苦肉の商策を弄する必要は絕對にない。それよりも客に一種の落着と溫味を與へることさへT風すれば、一度來た客は二度來、三度來る客は友達を誘つて來るのであるから、斯うした誤謬の說に迷はされてはならぬ。店が少し繁昌してくれば、一日に二三斗のミルクをこなすことは必ずしも難事ではない。若し日に二斗宛を販賣し得るものとすれば、一ヶ月の總利益は三百圓以上に達するのである。但し他の商賣に比して場所選みをするだけに、家賃は相當支出せねばならぬものと覺悟する必要がある。

▲手袋と足袋　これは編者が震災後の東京から得た、商品の新コントラストである。何故手袋と足袋とを結び附けて一つの商賣として紹介するかと云ふに、此他の商品を置いては惡いと云ふ意味からではなく、限られた三百圓と云ふ資本金を目標として起業の豫算を取つたからで、他は兎に角此商品は兩々相待つて商つてみたいと思ふのである。焦土と化した東京燒野原となつた東京、その東京は、今から何人も思ひ煩ふところである直額から吹き下す筑波颪、脚下に吹き上ぐる焦土の赤塵。その内に働らくと、外に働らくとを問はず人は皆冷氣と隣芥に惱まされる。の

である。此際防寒のために、また衛生の上から、各人の需要を促すものは手を包み足を覆ふ、手袋とそして足袋である。冬季に於ける足袋の需要は今更らのことではないが、當季に於ける足袋の需要は乾度驚くばかりであらうと信ずるのである、此場合にあつては手袋と足袋は相離るべからざるもので手袋と云へば足袋、足袋　云へば手袋と云つたやうに、面白いほど商ひがして行けると思ふ。そして足袋も繃子とかキャラコとか云つたものよりは、コール天とか別珍とか云つた實用向きの種類がつれ行きが良からう。手袋も亦通りで從來のやうな裝飾的な薄物よりは、厚手な本當に防寒用になるやうな品が要求されるであらう。此仕事で眞に一儲けしやうとするな

ら、大勇氣を振つて銀座の交叉點上野廣小路、淺草の雷門と云つた場所に、特に風の吹く塞い日を選んで路傍あきなひをやることだ。すれば奇利を收め得ることは正に疑ふの餘地なしである。

否でも金の儲かる派手な商賣

幾度も繰返すやうであるが、本書の收めるところは、本會が震災後の東京について親しく調査し、新らしく研究したもので、恐らくこれを適宜に應用して行つたならば、何人と雖も相當の金儲は出來る筈である。若し出來ないとすれば、それは編者が一項〳〵について明示してゐる、其職業の機微を摑むことが出來ず、唯同じ職業從來の舊套を遂ふて走るからである

同じカフエーと云ひ、同じ貸座敷業と云ふも、震災を一新紀元として、其處に新らしい營業法の必要が孕含まれてゐるのであるから、眞に本書によつて職業の暗明を定めやうとする者は、單に一章一項に止らず、全巻を通覽して其處に「金儲の東京」を摑み出して貰ひたい。既に一個人としての仕事、一婦人としての職業、小資本による事業の一斑は紹介したのであるから、以下は此區別と階級から離れて、順序不同に、報告書の順をだゞつて之を敍錄する事にする。

▲カフエー　一口にカフエーと言つてもカフエーカライオンやカフエーパウリスタのやうなのもあれば、二間々口の怪しげなカフエーもある。其處でこの程度のものを經營すれば良いかと云ふことを明示することは至難である。であるから茲には資本とか規模とか云ふことは各人の立案にまかせておいて、編者が研究から得た經營上の意見を發表して見やう。大小を通じて從來のカフエーは一種の美人島の觀があつた。經營者も美人系のボーイを置くを以て繁榮の基礎と心得、出入者も亦料理の味よりは其女等の送る秋波を甘味したものであつた。さらば此傾向は何處までカフエー其ものゝ發展を培ひつゝあつたか。編者は寧ろ之れを目して、常に經營者の蹉跌を與へたるものは此等美人系に屬するボーイであつたと云ひ度いと思ふ。故に今後のカフエー經營者は茲に留意するの必要がある。店に付いた客は永遠の客であり、女に付いた客は女限りの客である。爲めに

昨日般賑を極めた店が。明日衰退に陷つて遂に店を閉ぢた例は幾何もある。原因は美人系のボーイが其店に影を斷つたからである。天下斯くの如き馬鹿氣きつた經營法があらうか。二三の女給仕によつて巨資を投じた事業を左右せらるゝが如き、馬鹿々々しい商賣の秘訣があらうか。震災のために廢業することになつたが、向島の植半は其長い歴史に於て、仲居の進退によつて客の人氣を左右された話を聞かぬ。これ彼は輕浮なる女の媚びに由つて客を呼び、是れは眞劍なる庖刀の味に由つて客を迎へたるが故に爾りである。今後カフエーを經營せんとする者は、如何にして永遠なるべきカフエー其ものゝ客を得べきやに就て、充分考慮するの要があるのである。

▲日本料理店　カフエーと共にやはやう一つで否でも儲かる商賣は料理店である。以前は京都の着倒れ大阪の食ひ倒れと言つてゐたが倒れると起きると別問題にして、今では着る物の贅に於て京都を拔き、食ひ意地に於て大阪に讓らざるは東京である。殊に震災後に於ける東京市民の食ひ意地の張つたことは驚くほどである。或る程度まで東京文化の面目が復活してくれば、勿論衣服慾、裝飾慾、遊興慾して來るのは當然であるが、茲暫らくの東京市民の慾望は衣食住の順序を轉倒して、食住衣と云つた順序にあるのである。此點からしても飲食店は上中下ともに相當の金儲はできる。其中について、編者は中ごころの日本料理店を經營することが最も策を得たものではあるまいかと思ふ。今日左黨の困つてゐるのは手がるで程合ひの料理屋か無いことである。一流どころは金が掛かるし。と云つて、追ひ込みの雜炊や、怪し氣な小料理店は壓だし、西洋料理は落着がなくつて左黨の趣味に適せずと數へ擧ぐれば、廣い東京に手がるで、甘い料理で、心持の良い、落着のある料理店は一軒もないのであるから客の懷合を主とした高尚でなく、野卑でない料理店を始めたら成功疑ひ無しである。そして其の條件としては

一、部屋は客一組に對して一室を提供すること
一、箱は絶對に入れざること
一、女中の好みを高尚に酌は爲さしめざること
一、女中の祝儀を廢すること

一、料理と酒は吟味すること

此條件で經濟的に客を迎へて行つたら千客萬來である。目前の利收に於ては料理店と云ふ水商賣としては尠ないかも知れぬが、最後の勝利は其處にあるのである。大慾は無慾に似たりで、決して一時的の暴利が財を積み金を儲けるの所以ではないのである。

▲貸座敷業　これは營業地が局限されてゐて何處でもやれると云ふ職業ではないが、震災後大分倒産者があるから、若しやるとすれば吉原、洲崎ともに割り込む餘地は充分にある。公娼の存廢は重大なる社會問題であつて、編者にも亦一個の私見はあるが、今は金儲の研究であるから公娼存否の議論の必要はない。兎に角岩戸神樂の昔からの諺もあるやうに、性慾は原始的であり、復た生理學上餘儀ない當然の要望としてある。其要求を充さんとする者のために、自ら其要求に應ぜんとする者のために設けられた一機關が即ち貸座敷業である。娼妓と貸座敷業との內面的關係は嘗へ措いて、貸座敷としての經營法であるが、天下恐らく之れ位ひ改善の餘地のあるものはあるまい。先づ今後の營業方針としては第一に抱へ人を優遇すること第二に娼妓其ものゝ收入率を引高ぐること、第三には遊興費を低下することである。固より政府公認の下に高い稅金を拂つて、或る意味に於ての需要者と供給者との間に立つ仲介業者であるから、相當の利鞘を取るのは當然であるが、從來の業體は餘りに冷酷であり利得が高率に過ぎた。殊に時代文明の進歩と共に、人權は益々尊重され、如何なる婦人も目覺してきてゐる。更に震災後の東京に多くの倒産者と失業者を出してゐる。從來の如き高率の遊興費は如何なる性の要求者も堪へ得ることではない。故に今後はクダラない酒食の費用を省き、娼婦の報酬の引上、貸座敷業自又一定の料金を定めて仲介料を徴集すべしである。斯くする時に遊興者も安心して遊興し得るを以て、貸座敷は自然に繁榮を招き得るのである。華やかなに電燈の下に行はるゝ營業では、絶わず黃金のかゝやきが伴ふてゐる而かも眞に其かゞやきを捉ふるの妙諦は、商業不動の金條たる正直と忠實でなければならぬ事は茲に喋々するまでも無い事である。

奇麗で文化的で儲かる商賣（一）

商賣繁昌の秘訣が目先きの利くにあるが如く、金儲のカギを握ることも亦商賣の前途を知るにある只今日に金儲あるを知つて、明日の損失を考へぬやうでは、決して商人としての成功もなければ、儲けた金も砂上の樓閣のやうなもので何時押し流されるかも知れぬ。假に此所に是れならと言ふ商賣があつても、うまく之を運用して行く商才がなかつたなら、猫の前の小判と同樣、折角の寶も持腐れとなつて仕舞ふのである。如何に商業そのものゝ性質が文化的であるにしても、その遣り方が舊套を脫せぬ、非文明的なやり方であつたなら面白い結果を收めることは出來ぬ。苟も商賣でもしやうとする者には、勿論この心掛はあるが、茲に文化的商業を紹介するの機會において、特に此の覺悟の必要を促して置く次第である。

▲洋服既成品店　神田の柳原、芝の日蔭町と云へば、昔から洋服既成品の販賣街として有名なもので あつた。併し柳原物と云へば「あの釣るしんぼうか」と言つた調子で、何うにか（月賦でも）新調の出來るものは既成品を顧みなかつたのである。ところが昨春あたりからメト服、子供服の流行と共に既成品の需要が激增して來て、昔つては柳原と日蔭町に限られてゐた此種の販賣店が、一時に全市に亘つて續出したのであつたが、憐れ變災のために其大部分は類燒し去つたのである。もとより是等の店も復業するには違ひないが、此上更に幾十軒を加へたからと云つて、販路の行き詰まるやうなことは斷じて無い。貧乏なクセに見榮坊な日本人は、既成の洋服を買ふことを何にか大きな辱しのやうに心得て、ゐたのであつたが、外國では殆んど既成品で、餘程の金滿家か派行のボスター的社交兒でなければ、わざ〳〵服を誂へて新調せぬのである。我國に於ける需要がさみに增加したのは、斯うした外國の傳道的傾向からではなく、生活の壓迫から餘儀なくされた結果であつたが、最早や今日では經濟の見地から、一般に既成品が歡迎されるやうになつて來た。殊に製造者も生地は勿論、附屬品から裁縫まで精選するやうになつたから、其何等の點に於ても別注文と

選ぶところが無くなつた。そして此需用の大勢は今後ます〳〵増進して行くばかりで、衰退を來すやうなことは斷じてない。此故に此際既成品店を開業することは甚だ時宜を得たもので充分に成功の見込みあることを保證する。それに既成品を取扱ふには洋服裁縫店のやうな、技術もいらなければ經驗もいらない。製造業者から其季節〳〵の派行を聞いて夫れを仕入れ仕入に幾割かの利益を加へて販賣すればよいのであるから、どんな素人でも其日から開店が出來る。

▲洋品舗　洋品舗はつい十年ほど以前までは唐物店と云つたものである。取扱ふ品物の種類が多種多樣であるだけに元手も多く、殊に此商賣には店の設備に金が掛かるから、小資本では着手することは出來ぬ。それだけにまた利益も多く、文化的の商法として、嘱望するに足る事業である。この經營上の生命とも云ふべき誘引きは、逸早く其季節〳〵の流行を知ることゝ、其流行品を其シーズンに於て賣り捌き盡すことである。由來商品の流行、色合ひとか、模樣とか形とか云つたものは、皆な製造業者が商業政策の上から割り出してあらゆる宣傳の方法をつくして、之を流行として社會化せしめたものであつて。其流行の期間は短かきを以て妙とするのである。であるから流行品は其季節にこそ重寶がられ、相當以上の定價を保つのであるが、一度そのシーズンが過ぎて了つたら、振向くものもなければ、値段は二束三文となつて仕舞ふのである。流行品は斯うした危險が伴ふため、一般商品に比して賣値より元價が莫迦に安いのである。故に運よく仕入品の全部を賣り盡せば莫大の利益が上り、若し其の多數を賣りはづせば多くの損失を招くのである。而かも洋品店としての金儲の主眼は矢張り此流行品にあるのである。經營者にして能く此の急所と機微を捉へて逸することがなかつたなら、巨萬の富を積むに多くの歳月は要しないのである。

▲通信販賣業　これは新聞廣告、廣告郵便、其他普通郵便を利用して、或る種の商品を地方の需要者に供給する一職業である。其取扱ふ商品は一定してゐないが、從來の重なる物は書籍、繪畫、呉服、貴金屬の類である。東京と云ふものに十二分の憧憬をもつ地方人を相手に居ながらの商賣であるから氣樂なことは此上なく、遣りやう一つで充分に儲けることも出來る今その商品として何にが良いかと云ふことは指定することは出來ぬが、餘り高價でなく、郵送の上から量張らぬ品がよいと思ふ。高田早苗博士は「信用とは經濟化せる正直である」と云つてゐるが、此信用こそ通信販賣業者が成功の門に入べるき唯一の守本尊である。假に新聞廣告を利用して子供服の通信販賣を始める。そして此場合注文し呉れた者を得意として、今度は書通郵便で其得意に宛て、子供靴下一ダース幾何と云ふ新商品の廣告を送る。若し此際前の商品が氣に入つてゐて安かつたら、其の靴下も屹度注文して來る。二度續けて注文して來ればモウ動かぬ得意であるから、次から次へと賣り出す商品は毛布であらうと、半襟であらうと勧誘狀を出せば成功する。最初に信用さへ取つてあれば「あの店のならと」引續いて申込むで來る。自分が申込むばかりでなく「東京から斯う云つて來ましたがお宅でもいかゞです」と云らたやうに、他まで勧誘して取翻めて注文してる來やうになる。斯う云ふやうに一面には得意の信用を繋ぎ、他面に於て更に新方面を開拓して行つたなら、遂に通信販賣業者として名聲を全國的に馳せ得ると共に、又財を起すことも極めて容易である。

奇麗で文化的て儲かる商賣（二）

▲書籍雜誌店　人間はパンのみにて生く活る者にあらず、心にも亦パンを與へよ。之れは西洋の金言であるが、實際讀書は心の糧であつて、書籍は國民文化のバロメータである。此頃の新聞廣告欄の大半は殆んど新刊書と雜誌の發行廣告であつて、何うして斯んなに本が賣れるかと思ふやうであるが、事實飛ぶやうに賣れるから驚かざるを得ぬ今から十年以前には新刊物と云へば專門的なものは初版が千部から千五百部、小説や家庭向きの物さへ三千部、五千部の發行部數と云へば飛切りであつた。それが昨今では何うである。發行元が首を傾けながら出すもので初版が一万部、少し乘り氣のものになると五萬部、總賣上げ二十萬部、三十萬部と云ふ書籍は決して尠くないのである。此他に百餘種と云ふ

雜誌が毎月發行されてゐるのであるから、一般の讀書趣味が如何に向上したかと云ふことが知れる。讀書界の傾向が斯うである以上、書籍雜誌店の金儲の事業としての價値も亦自から明瞭の筈である。書籍雜誌の利益は他の商品に比較して割の良い方ではないが、其替りローズの出ることもなく、雜誌は賣れ殘れば全部返品が出來るから背負ひ込むやうな憂ひもない、それに讀書熱が今日のやうに不偏的になつて來た以上、どんな場所に開業しても相當の成績が上らぬやうな事はないから好都合である更に資本の如きも場所柄に應じ多くの都合で、多くでも良ければ少くとも亦差支へはない。

▲文房具店　これも綺麗で文化的な仕事の一つとして紹介するの價値かある。從前は筆紙墨の一通りも揃へてゐればが、今日では左樣簡單には行かぬ日本紙類も置かねばならねば、西洋紙も、手帳も、筆墨の用意もいれば、萬年筆からペン先き、鉛筆にインキと云つたやうに、商品はなか〳〵複雜になつて來た。それから客の多くが新知識の階級であり、男女の學生であるから、店構に所謂新らしい氣分を現はすことが必要である。若し店構が舊式の暗い氣分であつたら障子紙、卷紙櫻紙にキレー紙程の客はあるかも知れぬが、文房具店として一番に儲かる萬年筆に角封筒、新用箋と云つたやうな客は皆無と思はねばならぬ。つまり文房具店は文化的の商法であつて、客はハイカラの若い連中が多いのであるから、店も其氣分を受けて華やかな明るい氣分に作ることが、商賣繁榮の第一策である。又此商賣は書籍店とは正反對にローズ物が出たがるから、餘程此點に注意をしないと、勘定合つて錢足らずの結果を齎らす事があるから、經營者はよく〳〵よく注意する必要がある。

▲繪葉書店　編者は別項に於て、獨り者の簡易な識業の一つとして路傍の繪ハガキ賣を奬勵しておいたが、扱ふ品物は同く繪ハガキであ　ても、店となると餘程其趣きを異にしてゐるから、茲には一戸の商店たる繪ハガキ店の經營について所感を紹介することゝする。繪ハガキの購買力は、一時あつたを盛時代に比すれば慥かに減退してゐる。而かも其の購買力は今は健實化して來た。從前のやうな浮

和雷同的な客は影を斷つたが、其替り眞に繪ハガキ趣味を持つ購買者は增加してゐる。其結果として安物よりは上物の方が賣れ行きが良くなつてゐる。經營者としても二錢のハガキを五枚賣るよりは、二十錢のハガキを三枚賣つた方が採算上利益なのである。今一つの現象は繪ハガキが玩弄時代から脫して實用時代に入つたことである斯うした各方面の考察から見て、繪ハガキの需要力は今後增ゐることを決して減ずるもので無いと云ふことを斷案することが出きる。此斷案にもとづいて、編者は此事業も亦東京の復興とゝもに將來の社會に缺くべからざる文化的商賣として推擧しやうと思ふ。

婦人を御華客にする美しい商賣

婦人を第一の華客として、營業してゐる商賣は世間に尠くない、大資金を擁するものには美服店がをり、美身裝具貴金屬商がある。或は帝劇、歌舞伎も其一つに數へらるゝかも知れぬ。下つては化粧品店、小間物店等數へ立てれば枚擧に遑がない。今編者が下に紹介せんとするのは、此の限りない澤山の中から特に比較研究して、是れならと目安を立てた、所謂模範的なものばかりである。

▲牛乳店　或る一部には旺んに婦人の洋裝が宣傳され、日本の服裝は或る非常の場合に於て、婦人が眞擦を擁すべく餘りに不完全であると言つたやうな、突飛な議論さへ唱へられてゐる。併し日本の婦人の總てから、あの優雅な服裝が剝奪せらるゝの日は、遠いく將來であらう。先づ夫れまでは日本の婦人は矢張今までの服裝に滿足してゐるの外はない。服裝と婦人美の表現、そこに生活藝術は生れるのである尤も能く婦人美を表現するものは半襟である。半ゐりの研究は婦人美の善導であり、良き半ゐりの商いは婦人美の助長である。斯う書き立てると如何にも理窟めくが、要は半ゐりは婦人を一番に美しく見せるもので、婦人としても大切な化粧道具の一つであるから此商店は日本服のすたらない限り廢るものではないと云ふのである。或る審美學者は『日本の婦人は何んでも見當り次第に買ひ集めるからイザ着ると成ると美の

調和を缺いだものが出來上つて困る」と云つてゐるが、實際此傾向はある。半ゐり一つでも、是れが今年の流行であると云へば、其色合や模樣が自分の總てのリンカクや、上着やとの調和が何うあらうと平氣で掛けてゐるのである。其爲めに自分の美をどれだけ傷けてゐるかも分らぬ。是れから半ゐり店を開かうとするものは、無暗に賣り付けることばかりを考へないで、或るべく其人の顏立や姿に調和すやうな品を選んで勸めることである。左樣すれば掛けて見て、自分の顏との映りが良かつたら歡びもすれば、引續いて買つても與れる。つまり元手いらずの一舉兩得で、而かも商賣繁榮の基をなす所以である。

▲洋傘店　この蝙蝠傘も婦人に取つては單に日除け○實用品と云ふよりか、矢張り婦人美を引き立てる一つの裝飾具として、取扱はれてゐる傾きがある。それで實用上の耐久力なんか何うあらうと問題にはなつてゐない。只人見が善くつて、持つて居ても差して歩いても衆目を引く物でさへあれば良いのである。是れは極端の例ではあるが、或の一人の若い職業婦人らしい女が、俄か雨にあつて態ざ〳〵差してゐる傘をスボメて、それを抱へるやうにして濡れながら馳け出して行くのを見て、「はゝア彼の女は傘が餘程大切と見ゐる」と感じたことがあつたが、斯うまで露骨でなくとも、傘に對してヤゝ近い心持を一般の婦人が持つてゐるのは事實である。それだけに此婦人の心持を利用して行つたら、洋傘は隨分思ひ切つた儲けが出來る。震災前までは日本橋は唯一つ仙女香と云ふ婦人傘專門の製造販賣店があつたが、同じ洋傘店をやるなら此式に自製自商でやつて見たら面白からうと思ふ。そして何々家の傘は流行を代表するもので、而かも其傘は何々家より以外では賣つてゐないと云ふことになれば、自然に品物にも貫祿が付き、値段も充分に取れることゝなる。受賣りの小賣店も決して惡い譯はないが、そうなれば婦人向きの物よりか男子向きの安洋傘を商つた方が手つ取り早く行くであらう。殊に婦人は虛榮心の强いもので、同じ品物で値段は安すくとも無名の店の品を歡ばず、高くも有名な店から買ひたがるものであるから小賣店としてなら男向きの品に重きを置くのが安全である

▲めりんす專賣店　「めりんす」と云ひ、「モスリン」と稱し、上方にては是れを「ふくりん」と呼ぶも、つまりは同一の織布であるのである。一般の家庭における「めりんす」の需要は非常なもので、十歳前後までの子供の着物は大抵この「めりんす」が使用されてゐるが、着心地もよく、可愛らしくて一番よい。此外にも帶側とか、布團側とか、袖とか、裾廻しとか云つたやうに各方に重寶されてゐる。「めりんす」の友染模樣も年々進歩してきて、此頃では少し離れて見ると縮緬友染と見違へるほど精巧なのが出來てゐる。併し此めりんすには色合ひ模樣ともに、際立つて新流行と云ふものがないから、延ひて此點の廢りも少なく商賣を遣る上にも非常に都合がよい。それに「めりんす」ばかりを專門に商ふとすれば、見掛ほどの資本は要らず、外見は綺麗で華やかで、男でもツィ足を止めて振り返へるやうなことが幾度もあるから、まして子供持つ親、年頃の娘の心をそゝるのは無理もない。此商賣の客筋は從來は多く、下町や中流以下に多かつたが、震災後にあつては、或る特別の場合でない限り、上流階級の家庭でも子供用の色布れは總て「めりんす」を使用するやうに賣實の風を示して來たから此商賣は今後は一層に賑はい儲かる事であると信ずる。

大きな資本には大きな金儲（一）

如何に精力主義の勸勉家でも、一人の働きは矢張り一人の働きであつて、十人、百人並の仕事の出來るものではない。それと同じやうに、資本も一事業に大きく投ずれば、それから上る利益も當然多い譯である。大資本になると人が金を使ふのでなく、金に人が使はれるので、つまり金が金を儲けるやうなものである。編者は前十四章に亘つて、各種の方面から或は自已の勞力を元手として、或は百圓の金を、三百圓の金を、更に千圓乃至一萬圓の資本金によつて、成功すべき震災後の職業を紹介したが、以下二三章に於て、資本に依つて行ひ、資本に依つて儲けるところの、大規模の事業四五を紹介して本「職業篇」を終り、一轉して「成功篇」に移らうと思ふ。

▲活版印刷業　震災と共に人心を

寒からしめたものは、印刷文化全滅の聲であつた。けれど幸に博文館印刷部、日清印刷、其他中小幾多の印刷工場にして類燒を免れたものもあつて、全滅までは行かなかつたが、兎に角我國文化の中心たる東京が、印刷機能の大半を燒失したのは事實である。爲に發行を休止するに至つた書籍雜誌。遠く印刷を大阪に名古屋に、さては信州長野に求めて、辛而じて刊行し得たる物もあると云ふ有樣である。此際巨資を抱いて職を求むるものは、須からく此事業に投ずべしである。其金額は五萬圓以上多々益々便である。それは五千圓か一萬圓でもやれぬことは無いが夫れは今日の急に備ふべく餘りに小規模である、貧弱である。殊に此事業は震災後に於ける一有利事業とは云ひ條、其性質にあつては決して際物的なものではない。震災はなくとも尙ほ相當の設備ある印刷所の現出は社會が要求してゐたのである。然るを今日の震災後に於ておやである。若し一個の資力を以てして足らざるものがあれば、合資、合名、株式の組織によつて經營するも可である。事業の性質より見て決して突飛の利益はあり得べきものではないが、資本に對して年三割以上の配當を行ふことは此場合離事ではない。一面社會文化に寄與して他面には利殖が計つて行けるとすれば、是れ程愉快な事業はないのである。編者は印刷文化復興のために特に此事を推擧して、資本家の蹶起を促して切なるものである。

▲建築材料店　此所五年なり十年なりの社會で、成金振を發揮する者は土木建築業者である。復興院の設計も、個人の復業も兎に角く土木なり建築から序の口を開けねばならぬ。それだけに土木建築業者に取つては正に黃金時代である現に清水組の如きは復興院の計畫確定と共に全國の關係者に總動員を下して東京に集めると云つてゐる。土水建築界が斯うして殷賑を極めるとしら、其土木建築の材料店が閑な譯がない。先づ此場合本統に巨萬の富を作る商賣と云へば恐らく此建築材料店であらう。建築材料と云つても木材もあれば石材もあり鐵材もある。又練瓦にセメンに、各種の材料がある。それを全部一括して營業目錄とするか或は其内の一部分でやつて行くかは遣る者の考へと慾勘定である。

併し材料店の看板を掛ける以上、申譯のやうな店を出しては駄目である。そんな事では決して面白い金の儲かる筈がない。若し慾合ひで何うしても小ボケな店ほか持てないとすれば、寧ろ品物なしの店構へだけでブローカを遣るべしである。ブローカでも相當の資本と信用があつて、直ぐ注文品を納めることが出來れば　下手に商品を並べて金を寢かせて置くよりか利廻りも好く、金儲にもなる。但し此商賣は金も儲る變りに、運動費も入れば袖の下も入る商賣である一言にして盡せば品物の賣れるも金の儲かるも、此運動の宜しきと袖の下を使ふ呼吸の一つである。であるから此仕事は誰にでも遣れると云ふものではない。多少山氣があつて、大膽で太つ腹の人間でなければ遣れぬ。今日一萬圓損をして、明日十萬圓を儲け出す腕と斷引が必要なのである。

▲民衆旅館　これは體裁よく現代的な總稱を附けたまでと、實は從來の木賃宿に聊か改良を施したまでのものである。是れも有り來りの千住や業平の舊木賃宿のやうなものでなく、相當の資金を投じて大規模のものを作るのである。宿泊所の他に食堂と浴場、並に理髮店をも兼營するのである。收容力は尠くとも百名以上を宿泊せしめ得るもので、宿泊料は一泊三十五錢位ひとなし、食堂は公衆食堂並に朝が十錢、晝と夕が十五錢とするのである。理髮店は分類式にやつて散髮十錢、顔剃十錢、頭洗十錢とする。そして宿泊所と食堂とでは回數券を發行して見たら良からうと思ふ。それから浴場は一般が五錢なら四錢位ひにして、宿泊者に限り其半額の二錢、これも回數券を發行するのである。更に編者の希望としては、各事業ともに一切婦人を使用せざることである。或は食堂にだけでもと云ふ論者があるかも知れぬが、成るべく禁じた方が良いと思ふ。併し食堂には定食の外に二三品の小料理と酒類の販賣は餘儀ないことであらう。但し午後五時より同八時を限る位ひの規定を設けてとある。今後の勞働級は今度の變災の結果として相當の知識階級もあることであるから、其邊を顧客の標準として此私案に按配を加へてやつたら、充分成算の見込はある。尙此他に面白い附帶事業があれば加へつて行くのもなからう。

大きな資本には大きな金儲（二）

▲美人演藝館　これも編者が都合上命名した名稱であつて、一種の興行館に他ならぬのである。此の館の目的は勞働者級のものに慰安と娯樂を與へるにあつて、上演者は婦人藝人を限つたら面白からうと思ふ。つまり娘手踊とか、やすぎ節とか、女奇術とか云つたやうなものを極めて安價に觀せたり聽かせたりするのである。入場料は特等で五十錢、普通席が三十錢位ひが適當であらう。今日各方面では旺んに演藝界に關する改善や向上が唱へられてゐるのに、其叛逆的に、而かも復興の帝都に於て、斯うした低級な興行物をやらうとすることは、或る社會を毒する者この議論が出るかも知れぬ。けれど夫れは矢張り議論であつて、實際の社會觀から行くと、斯うした物が必要なのである。單に金儲と云ふ立場からでなく、社會政策の上から見て爾りである。由來人類は其男であると女であるとに拘らず性慾的觀念からではなく、只異性に對しては一種の憧憬を持つものである。殊に家庭の温味から離れて、一日を勞働に暮し、一夜を安宿に明すが如き勞働者に至つては更に此感が深いのである。是等のものに對して假令へ親しく接しないまでも、異性の氣分に觸れしむることは、其荒み行く心に一滴平和の血をそゝぐやうなもので、彼等が體得する慰安と享樂は之れに過ぎないのである。編者は此見地に於て美人演藝館が必ずしも社會を毒するものに非ざるを信ずると共に、一營利事業として上の上たるを信ずる者である。

▲護謨加工々場　この事業は世界戰爭後一時は非常に儲かつた仕事であつたが、此一兩年は餘りに振つてゐない。然かし決して見捨てられた事業ではなかつた。ところが今度の震災によつて更に擡頭的氣運に向ふことが出來た。編者の調査によると此事業は、餘りに巨費を投じなくとも相當の利殖は出來るものと思ふ。製品の種類も餘り多くなく最初は防水用のゴム引布とゴム靴ぐらひで良からう。そして販路を遠く求めず、全力を罹災地にそゝぐのである。靴はその性質として既に左樣であるが、布の方も勞働者向きの合羽やうの物を既製品として賣り出すのである

今後復興の仕事に働らく屋外勞働者は、少しぐらひの雨や風で休むではかりは居られないから、或る程度までは其れに備へる用意が要るのであるから、格安物で親切な製品を賣り出しさへすれば屹度飛ぶやうに賣れる。それに販賣店は特約店でも直接の出張所でもよいから、成るべく多く拵へて置いて盛にポスターで廣告をやるのである。ポスターの印刷の色彩を種々に取替へて、それを三日目か五日おき位ひに全市到る處勞働者の働いてゐるところに貼り廻すのである。若し出來るなら合羽の形の何處かに少しの考案を施して、新案登錄でも受けておくと、需要者の記憶も新たになつて更に妙であると思ふ。此事業は際物のやうであるが尠くとも今後五年乃至十年の繼續事業であるから與れ〴〵も製品には注意して聲價を納めるやうに努めなければならぬ。是れが此仕事の浮沈の定まる第一義であるからである。

▲海陸運輸業　是れも亦變災によつて盛昌の氣勢を擧げた事業の一つである。此仕事は各地の同業者との聯絡を第一とするを以て多少の面倒はあるが、鐵道省、日本郵船、大阪商船、東洋汽船等の荷扱ひの認可や特約が出來ればもう成功したものである。更に若し資金が許すならば倉庫業をも兼營すべく、自動車部をも設くべしである。斯うなれば取引上の信用も違ふし利益の上には多大の相違がある。そして經營上一番に大切な事項は荷物に對する確實と迅速の保證である。茲に言ふ確實の意味は送つた荷物の着不着ではない。途中に於て抜き取り破損のないやうにする事である。此事は一々自分が手を下すのではないから雇人使用上の注意に外ならぬが而かも事業上の一大動脈である。迅速に就ては知れ切つた事で說明するまでもないが、今後の如く其荷物の殆んど七八分通りまでが建築用材料である場合は、其僅か一日半日の遲速によつて材料店より請負師なりの懷合に增減の甚たしい場合にあつては特に注意してやる必要がある此二點さへ甘くやれば、乘機の客がぞん〴〵增ねて來て、店は目の廻るほど忙がしく、金は自然に儲かつて來る。編者は今日にあつて最も有望な仕事と信じて之を勸めるのである。

金儲でも理論は只一つしか無い

限り有る紙面で、限り無い職業の總てを紹介することは、到底出來るものではない。假に出來るとしても其處まで爲るの必要はなからうと思ふ。苟も火の出るやうに競爭の熾烈な今日、活き馬の眼を抜くと唱へられた東京の眞唯中で、而かも震災後の復興と云ふ大きな背景の前へで、金儲と云ふ大活劇を演じやうとする程の人間が、一を聞いて十には及ばずとも五六までは之れを知るの慧眼と頭腦がなくて、果して何事が仕出かし得られやう。そんな連中は柄にも無い謀叛氣を起さず、宜しく此渦中から距れて、地方にでも行つて生活安定の策を立つべしである。此言は甚だ露骨のやうではあるが、編者は眞に其の人々の上を思ふからである。卑俗に自惚れと梅毒氣のない者は無いと云ふ諺はあるが、自分をさへ知ることの出來ないやうな人間に、何うして時代が解らう。こんな人間に限つて決斷もなければ勇氣もない。只マゴ〳〵と職に迷つて考へてゐる内多少の貯へさへ使ひ果して、復た再び起つ能はざる悲境に陷るのである。こんな人間にお世辭を云つたり、油を向けたりすることは大なる罪惡である。是れ編者が大膽に其都落ちの可なるを說く所以である。更に轉じて、今日の過度時代にある東京に處して、眞に成功のカギを掴み得るの頭腦と才能ある人間であつたならば、編者が說き去り說き來れる數章の間に於て既に金儲の機微と、震災後に於ける事業の呼吸は充分に諒解した譯である。此機微と呼吸とさへ飲み込むでゐれば、事業の性質、商賣の種類は何んでも良いのである。つまり夫れを時代化すれば良いのである。震災後の東京に向くやうに改良を施設して、大に金の儲かるやうに考案すればよいのである縱てから說いても横から論じても理論は同一地點に歸着するのであるから、此上無暗に事業や職業の種類を並べ立ててみたところで、此上特種の想附が浮び出るものでもないから、一先づ「職業篇」は此邊で稿を結ぶことにして。既說數章について讀む者の熟慮獨想を促さうと思ふ。而して以下少しく金儲を前者の實例を紹介して見やう

今度の震災で金を儲けた實例

成功も失敗も、亦金を儲けるのも損をするのも、實は偶然した一つの機會からである。うまく其機會を捕へ得た者は、うんと金を儲けた上に社會から成功者として羨望されるし、捉へそこねた者は損を仕た上に世間から失敗者として振向かれもせぬのである。實業界の所謂成功には、或る嚴正の意味に於ける僥倖が手傳つてゐるのが多い。然かも其所に其人の不斷の用意と必死の努力が伴つてゐるのは勿論である。今度の關東に於ける大震火災についても、相當面白い金儲をした連中が少くない。これも多少天惠的な僥倖の力が手傳つてはゐるが、其所に活躍した彼等の奇智、商才、努力の跡は之を見逃すことが出來ないと同時に復た採つて正に學ぶべきところである。編者は散在せる是等成功者の話柄から、最も興味あり稗益ある幾多の實例を選んで、茲に紹介しやうと思ふ。それは「職業篇」に於て得たる考案の上に、更に實行の力を誘はんとする爲である

《其の一》

▲百丁の算盤が飛まり　飛け出された一人の洋服の注文取があつた店は丸焼になるし、注文は暫く取れさうにも無し、氣を腐らせてフサギ込むでゐたが、それでも震災後四五日から、未だ焼けくさい煙野ケ原を得意の見舞廻にと飛び出し、最初に遣つて行つたのは、此男が米櫃のやうにしてゐた稅務監督局の假廳舍であつた。すると顔馴染の一課長が「オイ洋服屋、お前の顔が濱いやうだが、何處かで算盤を百丁ばかり徵發して來ることは出來ぬか。此通り仕事が出來ないで困つてゐるのだが」。斯う云はれて見ると大切な御得意先きだけに、木で鼻の挨拶も出來ず、承知致しましたと、其處を出は出たもの、洋服屋には、是れと云ふ目當もなかつた。併し「何んとかして間に合せやう、そして喜ばれやう、そうしてさへ置けば今度注文を取る折りに、何に彼と都合が良いから」と云ふ考へはあつた。それから一生懸命になつて山の手方面の文房具屋と云ふ文房具屋を驅

け廻つて百丁の算盤を監督局に背負い込むだのは、頼まれてから僅か四時間の後であつたさうだ。其上其算盤に一厘の口錢も掛けず、買い値その儘に納あたのである。此男の機敏と正直に惚れ込んで仕舞つた課長は、「さうだ氣の毒だが働き次手に今一つ呼びリンを五十個ばかり心配して呉れる譯には行かぬか」と二度目の相談を持ち掛けたのである。既に前に成功したので多少勇氣も出てゐるし、それに是れを斷はれば前の苦心が水泡に歸するやうな氣もしたので、其男は復た二度目の呼びリンの注文も引受けたのである。併し引受けたものゝ以前の算盤と違つて、第一何處へ行けば品物を賣つてゐるかと云ふ見當さへ着かなかつた。其所で考へ附いのたは西洋料理店で聞合すれば大抵の見當は分るであらうと云ふ事であつた早速或る洋食店に飛び込むでテーブルの上のリンを指差しながら「姐さん是れは何處に賣つてゐるか、濟まないが帳場で聞いて見て呉れ給へな」と謂つた調子て、漸く其見當を得て、翌日は早朝から買集にから、つて「こんな際に賣れるもんか、思切つて負けて置き給へ」と負けさせるだけ負けさせて、品物は揃はなかつたが注文の數は揃へて買値で納めたのである。すると其品物は是れまで監督局で使つてゐたものより、づゝと品が良くつて、値が莫迦に安いので、課長は大いに喜ぶと共に更に其男を信用した斯うした結果、震災の爲めと職から放れやうとしてゐた洋服の一注文取は、其後も引續いて監督局の諸品買入の御用を請けて、今では相當の産を成し、生活の安定を得てゐるのである。

▲義俠で拵た品が飛ぶ　千葉縣とかの名士二三名で經營してゐる曲木工場が府下にある。製品の重なものは曲木椅子であつたが、此處二年ばかり事業の振はないのに、更に昨年から製品は殆んど積み込むばかりと云ふ有樣なので、關係者の中には一時職工を解雇してはと云ふ意見を持つものは出來たが社長と云ふ男は却て理窟の解つた男で、「儲ける時ばかり追ひ廻して此方の都合が悪いからと云つて職工を解雇するのは、餘り職工に對して氣の毒だから、今暫く此儘に繼續して見やう、製品は幾何出來たからつて嵩る品でもないから」と云つて、今日まで平氣で仕事を

續けて來てゐた。すると九月一日の大震火災が襲つて來て、文化の殷賑を誇つてゐた東京の中樞地を焦土と化して了つた。その燒失した建物の中には民家は勿論、多くの官廳もあり、會社銀行もあつたさて假事務が出來て事務を取り始めやうとすると、第一に困つたのはテーブルに椅子とであつた。テーブルは假に板を打附けた物でも辛棒は出來るが椅子はさうは行かぬ。そこで警視廳は第一着に千脚の倚子の納入を曲木工場に命じたのであつた。曲木工場に倚子があると云ふことが一般に知れると、各官廳を如め各會社銀行から續々注文が來て、倉庫から物置、はては事務室にまで積み重ねてあつた一萬幾千脚と云ふ倚子が、僅か二日間の間に賣切れて了つて、それ以來夜を日に繼いで製作を急いでゐるが、今受けてゐる丈けの注文を仕上げて納めるのが、年内はちと無理であらうと言つてゐるさうだ。世の中のことは凡て塞翁の馬である。若し此の社長が目先きの支出を恐れて、一時職工を解雇して工場を休業してゐたら、如何にモガいても今度の金儲は得られない筈である。是れなぞは今度の成功者中にあつて最も美談とすべきものである。

《其の一》

▲パンの買入が美事に成功　これは金を儲けた話ではないが、あの非常の秋に當つて、少しも騒がず其場合に處する方法を講じたと云ふ、用意と落着は移して商賣の成功を收むべき要素であるから金を儲けた人と一緒に紹介して置かうと思ふ。銀座の或る樂器店の主人は、嘗つて商用で海外に出かけてゐた際、恰ごサンフランシスコの大震災に遭遇したのであつた。ところが日本にも今度のやうな大震災がやつて來た。銀座邊も家こそヒックリ返へらなかつたが、商品はガラ〳〵壞れる、壁は落ちる、硝子は破れると云ふ大騒ぎであつた。それでも一震二震の强震が過ぎて、段々弱くなつてくると皆が安心して、「もう大丈夫でせう、これが夜分なら火事が方々に起つたでせうが、まあ晝で幸でした」と云ふやうな事を話し合つてゐた。しかし樂器店の主人は決して安心しなかつた。否、過去の經驗から押して、火事は未だ各所に起るもの、水道は斷水するものと云ふこ

こを信じて疑はなかつた。そこで店員を派して近所のパン店から有りたけのパンを買込ませ、又使を出して白米を二俵ほど買入れ、その上水の用意までして、其全部を荷車に着けさせて、萬一の場合は第一番に是れを曳き出すやうにと命じた。近所の者は勿論、家内の者さへ主人のあまりにギョウ〳〵しい逃げ仕度を笑つたものだ。ところが主人の想像通り、火はだん〳〵各所から起つてきて、日本橋から京橋、銀座の全部をも燒きつくして了つた。けれど其處に到るまでには多少の時間もかゝつたので、銀座邊には一人の死傷もなく皆相當に荷物を持出すことも出來たやうであるが、偖て命から〳〵避難して見ると、先づ第一に誰もが感ずるのは食料と飲用水の缺乏であつた。斯うなつては金も力も一片のパン一椀の水を得るに何んの役にも立たなかつたのである。此時に當つて數日をさゝへ得る食糧を貯へ、一家の者のみではなく他の餓ゑんとする者にも頒ち與へて、不幸中の幸福を語つたの彼の樂器店の主人であつた。若し此用意を轉じて、此機會に於ける金儲に用ひたら、驚くべき金を儲け得たことは想像に難くない。

▲見當り次第買込む〳〵　二三萬圓の資産はあつた人であるが、變災のためにスックリ丸燒になつて仕舞つて、殘つたのは現金で僅か千圓足らであつた、けれど此人は却々な元氣な人で、命さへ助かれば財産ぐらいは直に何うにかなるとばかり、早速バラック建の建築に取りかつた。そして大工や人足の手傳をしながら通りを見てゐると荷車に丸太の材木を二十本ばかり積むで行く男がある。此人は別に何に使ふと云ふ考へも無かつたが、「オイ其材木は賣るのか」呼びかけて見たすると「賣つても善いよ」と云ふから、冷かし半分に値を附けると案外早く手打ができたので、其人はフイ考へた「かうして買込むで置けば屹度儲かるに違ひない」と。それからと謂ふものは、見當り次第、値段にはお構ひなしに、金の有りだけドシ〳〵材木を買込むだのである。併しドシ〳〵と云つて見たところが根か千圓の金のことであるから知れたものであつたが、それで買込む一方からジン〳〵賣れて行くから、元手の舞もついて、一週間ほどのあひだに燒失した二三萬圓の資産は

取り戻したさうである。それも自分も丸燒になつた苦い經驗を持つてゐるだけに、決して暴利なんかで商つた譯ではない。來る客に對して、「皆さんの便利を思つて買つたのですが、何分此方も燒け出されの丸裸ですから、元値に三割だけ口錢を下さい」と内譯語をして賣つたので、買ふ人も非常に滿足して買ふも、値段も他の材木店などから思ふと二割方は安かつたさうだ。或る機會さへ捉へれば、人に歡ばれながらも金はズン〳〵儲つて行くのだ。

▲お見舞の握飯配達　これは金儲をしたと言ふ程儲けたのではないが、奇智から失業を免れた一例である。古い小說家ではあるがあまり世間に名も無ければ傑作も無く此頃は駄小說や新講談ぐらい書いて、お茶を濁してゐる一人の男が或る郡部に住つてゐた。此男も地震が濟むでから、屹度火事が各所に起るものと思つた。尤もあれほどの火災であることは思はなかつたにしても。其處で幸い賣ひ合せた原稿料が百圓あまりあつたので、自分は固より妻君も子供も一家全部が手別けをして彼方で一斗、こつちで五升と云つたやうに、合計一石ばかりの白米と、副食物になる野菜と乾物を買ひあつめて置いたのである。所が案の定、朔日の晩から二日の午前にかけて東京の八分通りをやきつくすやうな火事が起つた。是れを見た其小說家先生は「さあ用意々々」とばかり、妻君や子供を勵まして炊き出しの準備にかゝつて、三日は早朝から十七になる伸と二人で、にぎり飯と菓子を詰め込むだ大きなバスケットを一個づゝ背負ひ込むで、日頃原稿を賣つてゐる雜誌社とか、其所の編輯主任とか云ふものゝ立通き先を、汗身ごろになつて探し廻つては其にぎり飯と菓を配つたのである。それも一度限りではなく一廻り濟むと又最初からと云つた風に五日間ばかり、ぐる〳〵と御見舞のにぎり飯の配達をやつた。賣つた連中の歡びは素晴らしいものであつたが、其効顯は間もなく現れて、それ等の連中の關係してゐる雜誌がいよ〳〵復活して發行される事になると、從來は三拜九してもあまり嬉しがつて買つてくれなかつた原稿を、先方から執筆方を依頼してきたので、小說家先生此頃は眼のまわるやうな忙しさ「吾輩は地震でスッカリ文壇に若

返つたよ」と澄してゐるさうだが決して此結果のあるのは偶然ではない。彼が先見の明と大なる努力の賜であると云ふべきである。

《其の三》

▲見る間に儲かる五百圓　別に儲かる金額が五百圓と定まつてゐる譯ではない。寡い時は百圓もあらうし五十圓もあらう、多ければ五百圓は愚か千圓も二千圓も儲かるのである。よく商賣往來にない商賣と云ふが、此仕事も商賣往來にはない筈だ。牛込に家屋建直し修繕請負と云つたやうな商賣をやつてゐる男があつた。それは壞れたり、倒れかゝつたりしてゐる家屋を建直したり、修繕するので、相當人手も要れば道具も要る商賣であるが、それは却々慣れたもので大抵な家屋の傾いたのなら、三四時間の間に建直して壁の壞れまで修繕して了ふさうである。此建直し屋さんが震災後儲ける金は驚くべきもので、地震で壞れ掛けた家を、三百圓なり、五百圓なりと建直し料で建直しを引受け、直ぐ其料金を前金で受取るのださうだ。前拂いでなければ着手せぬ代りに着手したが最後、ほんの見てゐる間に仕上て了ふのであるから、順序よくさへ行けば、同じ人手で三四軒の建直しは平氣なざうだ。假りに一日に五百圓の仕事を二軒宛仕上るとしても、もう十萬圓近くの金は儲けてゐる譯であるが、世間には斯うしたボロイ儲け仕事も隨分あるやうだ。

▲震災喜劇で大當り　曾我の家の五郎と云へば誰れ知らぬ者もない喜劇の親玉であるが、此五郎は恰度震災の當時東京に來てゐて、新富座で蓋を明けてゐたものだ。未だ樂屋入りには早かつたから幹部側は宿屋にゴロづいてゐたであらうが、大部屋連中はもう小屋に乘り込んでゐた。それに彼のグラグラと來たから、流石の喜劇役者も眞蒼になつて振るひ上つてゐる其脚下から、今度はまた火事とお出でなすつたから堪らない。着の身着の儘で泣く〳〵大阪へと逃げ還つて了つたのであつた。所が目先きの早い五郎は歸阪早々松竹と相談して浪花座で、震災體驗劇を開演して、震災を材題としたものを一つ中幕に出した。そればかしか其劇の一場面として自分達が逃げ出すところを出して、其當時本當に着てゐた鏡こけや泥だらけの着物をそのまゝ舞臺の衣裝にして、非常な人氣を呼び、閑古鳥でもなき出しさうな道頓堀に、此所ばかりは連夜木戸止め滿員の大當りを取つたさうであるが、五郎なぞは先づ震災後に於ける劇界での大成金と云ふことが出來やう。

▲此方でも御用彼方でも御用　是れは横濱にあつた話である。震災後横濱の税關では、何時ではなしに倉庫に貯つてゐた、煙草の這入つてゐた木箱の空を、全部只のやうな値段で拂下げたのである。それを買取つた商人は、少し世間でも鎭まつたら又買手も附くであらう位ひの考へで、二三名の運送屋を相手に其箱を荷車に山のやうに積み上げて少しやつて來ると、「もし〳〵其箱は分けていただけませぬか」と云ふ者があるから「それは分けない事もないが一つや二つでは困ると云ふ」と「皆なら尙結構です」との事に、それならと相當な値で其者に賣つて遣つて、直ぐ引返して二度目の箱を積出して其邊まで來ると、「私にも是非讓つて下さい」云ふから、又賣り飛ばして、次の荷をひいて來ると、「何うぞ私にも分けて下さい」「讓つて下さい」「下さいでトウ〳〵一臺の荷も家まで運ばず、すつかり賣つて了つたさうだ。何分税關が持て餘して只のやうな値で拂下げた物だけに思はぬ大儲をしたのである。其空箱を買つた者は何に使つたかと云ふに、バラック建築の用材に代いたのだと云ふから、買つた方では新らしい板を買つたよりかウント割安で出來上つた譯である。

《其の四》

▲一杯の水から三千圓　東京に住つてゐる連中が、田舍からの來客に對して「東京と云ふ所は水までにお金が出るのですからねね」と云つて、水道税の出る話をして、都會生活の苦しさを立證してゐるのは編者も能く耳にするところであるが、是れは又東京の眞唯中でコップ一杯の水が五錢乃至十錢と云ふ値段で飛ぶやうに賣れて、僅か一週間足らずの間に三千圓を儲けた男があるとは、嘘のやうな事實である。其の商賣の性質から見て決して褒むべきものではないが而かも需要に對する供給であり、其の機を見るに敏なりし點に於て敬服せねばならぬ。それは大震後の九月三日頃から、誰が言ひ合せ

た譯でもあるまいが、餘炎と殘暑に包まれた焦土の東京の、最も人通りの多い銀座の交叉點、日本橋須田町、兩國、上野廣小路と云つた所に、四斗樽を並べて飲用水のコップ賣をやつた者が幾人あつたか知れぬ。實際燒野原をものゝ四五丁を歩くと、餘炎に息が詰つて來て、誰もが水を要求して來るのである。この急所を捉へたのが水コップ賣り屋であつた。全市の水道は破壞されて一滴の水もなかつたのであるから、彼等は大方市外の龜井戸とか、品川、大崎、又は田端、スガモ邊りから井戸水を運び出したのであらうが、コップ一杯の水が十錢なり五錢なりで目の廻るやうに賣れて、それで買つた者が腹も立てず「お蔭で助かつた」と云つて喜んでゐた有樣は哀れとも笑止とも形容の仕方がない。この水賣りは皆相當に儲けたに違ひないが、兩國橋の本所寄りの橋の袂にでゝゐた水賣は龜井戸の者であつたが九月の三日から十日までに三千四百圓からの水を賣つたさうである。尤も賣手が二人、運搬係りが二人であつたと云ふから都合四名の仕事ではあるが、確かに震災が生むだ一成金たるの資格は充分であると云へる。

▲人間を運んだ荷馬車　强震大火後の東京は暫く混亂の天地であつた。身を以て逃れんとする者。急を聞いて現狀に赴かんとする者。けれど是等の人々を運ぶに全市及び近接町村に一つの交通機關がなかつた。電車は通はず、自働車の多くは各官廳の救護用に徵發され人力車は車夫又多く罹災者であつた。この時にあたつて、荷馬車のみは多く其立て場が府下であつたゞけに交通の便を助けて、二日以後十日前後までは人を乘せて賑つたのである。一臺の車に二十人の人が抱き合ふやうに乘つて、それで大抵は一人前の賃錢が平均の一圓であつて、其車は大森から新橋際までゞ、其所から引返して又來るのであるが、往來とも客は滿員であつて、一日に六回の往來をしたと云ふから、一日百圓内外の日當にはなつて居る譯である、假りに二日から十日までとしても優に一臺の荷馬車が千圓を儲けてゐることゝなる。其當時自動車は東京横濱間が往來六十圓であつたと云ふから、敢て荷馬車もボツタ次第でもあるまい。兎に角荷馬車も震災當時に於ける金儲の一つであつた事は確である。

▲奥の大增の社會奉仕　社會奉仕と云ふ言葉は一種の流行となつてしまつて、餘り有難味を感ぜなくなつたが、それでも決して惡い氣持はせぬ。淺草觀世音と共に災火を免れた仲店の奥の大增と云ふ料理店は、四日の日から類燒を免れた祝意を兼ねて例の社會奉仕の大看板を揭げて、しるこ十錢、天丼五十錢と云ふ大勉强で賣出したが食を求むる人々は潮のやうに押寄せて、朝九時が午後五時まで立錐の餘地もない大入で、四日から十二日までの總賣上高が七千八百圓餘であつたさうだ。其後はときわとか多津已とかいふ同業者が出來たが夫れでも客は落ちなかつたのである。震災後七十日を經た今日でも、大增には客が一ぱいで暫く表で待つて、其上喧嘩腰でなければ一椀のシルコが食へないと云ふから、その全盛のほどは想像するこゝが出來る。全市到る所に食物屋が儲かると云ふので、バラックに野天に、一口洋食牛めし、一すいとんと云つたやうな店が軒を並べて、それで皆相當に利益は上げてゐるやうであるが、恐らくは大增の右に出る儲け屋はあるまいとの定評である。

《其の五》

▲やけた金庫で黄金の庫　これは金庫と限つた譯ではなく、印刷機もあれば、メリヤス機械もあり、タイプライターもある。總てやけた金庫を始め其他の機械であるが震後災それを買あつめて、既に幾十萬と云ふ金儲をした男がある。その買入に着眼した男は、鎭火後直ちに焦土の大路を縱横に飛び廻つて、眼星を着けた品物は、其立退き先きまで追ひかけて行つて、「跡方付の御邪魔ですから、あの金庫のやけたのを値好く戴きたいもので」とやる。なる程さう言はれて見るとやけてしまつたものだから、少しでも金になるなら手放して仕舞ふうと「賣つても良いが幾何で買ふか」と云つた工合で、案外手取早く取引を濟したのである。賣る方は一遍火に入つたのだから、もう修繕も出きず使ひ物にならぬと思つて、屑金以下の値段で皆手放して了つたのであるが、實は同じやけて居ても、今度の火事は水がなかつたのであるから、この品物にも水はかゝつてゐない

水の掛からぬ品は修繕さへすれば立派に用に立つのである。別にペテンにかけた譯でもあるまいが、兎に角斯う言ふ調子で、一方からは買集めて來て、一方ではドシ〳〵修繕して賣出して、驚くべき利益を得て、其男は今では新ら物の諸機械のブローカをやつてゐるさうであるが、僅か一ヶ月たらずで儲けた金は幾十萬圓と云ふから、今回の成金番附の上では幕内であらうか。

▲來るは〳〵亡者共が　迷信は必ずしも日本人のみの特有ではなく世界いづれの人種にも相當の迷信はある。殊に今回の如き非常の秋にあだつては自分で自分の事を何う決定してよいか分らぬ。これは確かに自己の意志の薄弱なことを表白するものではあるが、亦余儀ない人間の弱點である。此弱點によつて大儲をしたものに淺草の觀世音があるが、之れは番外として次は易者である。日頃は易を見てもらうなんか馬鹿の骨頂であると思つて居た者も、家は燒ける財産は無くする、さて是れから何うして行かうかと云ふ事に思ひ煩つた結果が、一つ易でも見てもらつた方針が立つたも知れぬと云つたやうな調子で氣迷ひをして居る連中は、周易占ひの看板さへ見れば「私の運勢」はどか「是れからの商賣は何が良からう」とか云つ易を立てゝもらうのである。易者の方では此等の連中の事を總稱して亡者と云つて居る。其意は迷つて來るのを諷したものである。震災後此亡者の數は驚くべきもので、淺草邊の路傍の易者を始め各所にある堂々と豫言者よばわりをして居る易者に至るまで、一時は亡者で門前市をなすの有樣であつた。爲めに如何なるヨタ易者でも一晝夜に二三十圓、上の口の易者になると百圓内外の收入があつたさうである。因より當るも八卦あたらぬも八卦であるから、その易の示したところが何程觀て貰つた人々に利益するところがあつたかは分らぬが、大正文化の時代にあつて思はぬ有卦に入つたものは東京及び横濱に散在して居た易者であつたことは事實である。

▲噴嚏半分で金儲　震災後最も鼻息の荒いのは印刷業者で、また儲ける點においても人後には居ない。お客の方から詞を低うして「是を一つ願へませんか」と賴んでも、「どうしても一ぱいで」と斷る。それを是非にと押返して賴むと「それでは何んとか都合して見ますが、御値段は少し上りましたよ」と先づ前提を置いての見積額は、震災前までの三割乃至五割高である。それでも他に多く印刷屋がないので高いを承知して賴むと、今度は明日は遲れる、校正は亂暴にやられる、文字は一號のところに四號や三號を搦込まれる。それで不足でも云はふものなら「文句があるなら他へ持て行つて貰ふ」と云ふ劍もホロヽの挨拶である。そして同じ賃銀の職工を使つて高い料金を取るのであるから、此場合噴嚏半分に威張り散らしながら金儲をして居るのは印刷屋であつて他には類があるまいと思ふ。尤も印刷屋と云ふては大は博文館から小は横丁の名刺專門の店まであるから儲の程度は一定せぬが、少くとも皆共に三割以上の利益が臨時に增ねたのは疑ふまでもない。

《其の六》

▲機敏に賣出した借地法　商業の秘訣は機を見ることと、即ち眼先きの利くことである。今度の强震に伴ふ大火災の結果として、當然各所に起るものは借地人と地主、借家人と家主との爭議であらうと着目したのは一小繪草紙店の主人であつた。機敏な其主人は燒失した店の跡始末など顧みず、やうやく一家の者を避難させると共に、交通の不便をして大阪に赴き、法令中から借地、借家の兩法律の條文だけを拔萃して、これを印刷に付したのである。そして印刷が出來上ると東京に持ち込むで盛んに大風呂敷を廣げて、其本さへ見れば何んな爭議にも勝利を得ることが確實であるから、舊借地、舊借家跡へバラックを建てやうとする者は必ず讀むべしと云つた調子で賣出したのである。ところが此問題は遂に區裁判所が各區に臨時出張所を設けて解決に努力したくらひであるから、バラックでも建てやうと思ふ者には是非共知りたい事柄であつたゞけに、其本は非常な勢ひで賣れたものだ。聞く處によると旬日にして三萬部を賣盡して、更に二萬部を增刷したと云ふことであるから相當の利益を贏ち得たことは確かである。只編者が此書を見て遺憾とするところは、成る程金を儲けると云ふことが主眼ではあるに違ひないが、單に夫れを條文の拔萃だけにしないで、

尠くとも一般の者に内容を理解せしむるだけの説明を附してあつたらと思つたが、或はそれは急場の場合だけに無理な注文かも知れぬが、苟も人々の便利に供へやうとする限り、是非共此親切はめつて欲しかつたのである。

▲不意な需要に全部賣切　これは別に畫策をめぐらした譯でもなければ、賣るべく努力した次第でもなく、眞の僥倖から俄かに需要が激增して、思はぬ金儲もすれば、綴拂ひもした　例である。一度强震が襲ふと同時に、東京と云はず横濱と云はず、苟も此强震に感じた範圍は一時に電燈も瓦斯も其能力を失つて了つて、夜は全くの暗黑世界となつたのである。此場合少數のランプを持ち合せたもの、他は總て光明を蠟燭の力にまたねばならなかつたのである。各戸の家庭も、夜を戒むる警官も自警團員も蠟燭を離れては一歩の活動さへ出來なかつたのである。斯くして常には人力車夫の提灯を第一の需要者としてゐたローソク屋は一躍して驚くべき需要者の激增を見たのである。爲めに東京全市、その他近接町村のローソクは二日の夜一晩を以て其全部は賣り盡され消費し去られて、三日には遠く近縣に買出しに出掛けると云ふやうな騷ぎを演出したのである。此狀態に乘じて一本二錢で賣るべき筈の品を五錢に、五錢に賣るものを十錢に賣つて暴利取締令によつて所罰された者もあつたが、これは單に一部の小賣人の出來心に過ぎないが、別にボラなくとも一年分も二年分もの貯藏品をわづか一日に賣盡して、尙且つ夜を日に繼いで製造に努めて其需要を充すに及ばなかつた、製造業者が收めた利益は莫大なものであつた。

▲何でも無い復興財布　人間の心理ぐらひ面白いものはない、若し其鳥渡した機徴さへ捉へれば金儲なんか、案外馬鹿氣きつたものである。常から人を集める點に於て日本一と數へられてゐた淺草の觀世音が、周圍が燒き拂はれた眞唯中に只一寺だけ殘つたと云ふことが恐怖と不安の中にある罹災者の信仰心を喚起して、震災後は其以前にも增した人出である。此人出を見て或る際物師が考案して賣り出したのが小形の手拭地の布で作つた財布である。そして、是れに「復興財布」と名稱を附して「さア御買ひなさい緣起の善い復興財布

觀音樣の御利益も此財布には籠つて居ります」と言ふやうな工合で仲店の燒跡を始め觀音堂を中心として各所の路傍で賣り立てゝ見たのである。こころが不思議にも人々の好奇的迷信に投じて、其財布の賣れること賣れること、かんじんの本人さへ面喰つた程であつたと云ふから餘程賣れたものと見ねる。それに一個工賃まで入れて五六錢で出來上るものを、驚く勿れ廿五錢と云ふ高價で賣つたのであるから儲かつた金高も決して僅少ではなかつたらう。これなどは一種の商才の働きであつて、仕出かして見れば「あゝ何んのことだ」位ひのものではあるが、然かも其處に機會を捉へやうとしてゐた不斷の用意と、人の心理の機徴を捕へるの商才とは決して侮ることが出來ぬ。寧ろ採つて學ぶべきものがあると思ふ。

《其の七》

▲何處迄も女に集る人氣　マークットは大震後に於ける大いなる流行の一つであると共に、其成功したもの、一つたるを失はぬ。最初の幕開きは燒殘りの大丸吳服店に始まり、次で白木、伊藤松坂、三越。高島屋と云ふ順序で、所謂五大吳服店が各所に出張してマークットを催してゐる他に、日米マーケットと云ふやうなのも開かれてゐるのである。所が少し後れ馳せではあつたが燒失した神田劇場跡に、同劇場の持主青木某の主催で「從來の御客樣の御愛顧に酬ゆる爲め」とあつて「神田劇場マークットと云ふのが開かれたのであつた。すると都下の各新聞紙は筆を揃へて、同店の店頭には嘗て女優として一代の嬌名を馳せた中村歌扇が控へてゐて、盛んに愛嬌を振り撒いてゐる由を誌し、其寫眞までも掲載したものもあつた。此新聞紙利用の政策が成功したのか、それとも姥櫻ではあるが未だ獨身の中村歌扇の色香を逐はうとする人の好奇心か、多くある專門商店のマークットを他所にして、わざ〳〵神田三崎町の燒野原まで押寄せた客は、毎日驚くばかりで、最初遊んでゐるよりはと始めた店が意外な利益を上げたのに青木某も勇氣を得て、其利金を土臺として近く神田劇場の再興に着手し、來る正月の中旬には蓋を明けて、中村歌扇をも再び舞臺に起たせるさうであるが、實際神田劇場マーク

ットの成功したのは女優歌扇が店頭にあつて、客に應援したと云ふことが大なる因をなしてゐるのであるから、歌扇の舞臺に於ける復活はやがて神田劇場の復活であらう。兎に角神田劇場は同じマーケット中にあつて最も素早く金を儲けたものである。

▲思はぬ儲けの各演藝場　震災後第一に悲觀に陥つたものは花柳界と演藝界とであつた。成る程焦土の化した都會の有樣を見た時飢を訴へて叫ぶ人々の聲を聞いた折、何人と雖も、もの〻一と月や二月で白粉の香に寄る者、演藝に笑ひ興ずる者が出やうとは想像し得なかつたのである。所が事實は驚くべき反比例を示した。花柳界のことは暫くおいて、燒失を免かれた各活動館、各寄席が其筋から人心融和のためとあつて開演は許されたもの〻、到底不入と思ひ込むであるたゞけに容易に開演するの勇氣は出なかつたのである。其所で各營業者は藝人や辯士に給料の引下の相談をしたり、特約會社にフィルム賃貸料の割引を交渉したりした結果、漸く十月の中旬頃から怖々蓋を開けたのであつた。すると想像はまるゝり脱れて、蓋開けの其晩から各演藝場とも大入滿員で今に至るまで一日でも客止にせぬ處はないと云ふ景氣である。或る者は此現象を指して、人心が慰安と娯樂に久しい間饑てゐた結果であると云つてゐるが、其原因が何うあらうと結果が何んであらうと演藝界に取つては景氣さへ良く、金さへ儲かれば天れでよいのである。斯う云ふ風で、第一に悲觀してゐたものが殷賑を極めて、或る郡部の活動館について聞き合せて見ると、客は震災前の一倍半の增加であつて、まるで毎日正月の三ケ日のやうな景氣であると言つてニコ〳〵して居たが、各演藝場經營業者も地震が生んだ成金の部類に數へられやう。

▲防寒用で賣るは〳〵　空腹に食量のないのを忍ぶことが出來ないやうに酷寒の用意のないのも決して樂〻なものではない。と謂つて今日の罹災者の多數にあつては充分にそれに備へるだけの夜具や布團を買入るだけの餘裕はないのである。其所でせめてもの防寒用の寢具としての比較的輕便に買入ることの出來のは毛布である、此點に着眼した其餘の商人は盛んに安毛布を仕入れて、賣立てゐるが

編者の調査したところに依ると、二枚續き一枚五圓賣の物の元價は一ダース三十圓見當、同八圓賣の物の元價は五十圓見當であるから一枚に對して優に四割以上の利益がある譯である。或る毛織物商の一人は神戸から虫着きのストック品五千ダースを一枚一圓二十錢替へて引取つて來て、小賣商人に一枚五圓宛で卸し、小賣商人は一枚當り九圓から八圓五十錢に賣つて大儲をしたと云ふ話もある。又或る者は一千ダースを一枚當り九十錢で仕入れて三圓乃至二圓五十錢で僅か七日間に賣り切つたと云ふ話もある。兎に角營利業者であるから金を儲けるのは當然のことであるが、他人の不幸を幸として餘りに暴利を恣にすると云ふことは決して褒めたことではない。然し金を儲けたには相違ないから實例の一に擧げておく。

斯して富の成功者となる可し

復興の途上にある東京に於ての金儲法それは前述の凡てに於て其概要は盡したことゝ思ふ。本書は一見甚だ貧弱な小冊子に過ぎないが其量に於ては優に普通四六版二百頁の內容を收め得てゐるのである本書篇を分つこと四篇、章を設くること二十章、而して六十種に近き職業の新研究を發表し、二十種の成功者實例を擧げてゐる。幾度も繰返すやうではあるが、若し本統に相當の用意を持つて本書の全卷を讀破したならば必ず書中より金儲のカギをつかみ得た筈である併し乍らカギばかつかむでゐるても之を眞に良く利用して成功の庫を開かねば所謂寶の持腐れで何んの役にも立たないのである。編者は讀める者、否眞にカギをつかみ得たる者に對つて直に之を利用せよと慫慂したいと思ふ。機會は直に去るものであるカギさへ有ればと思つてゐる中に何時しか折角得たるカギも錆び用を爲さぬに至らぬとも限らぬ　更に注意をして置きたいのは、金儲は世渡りの手段であつて、人間には他に大なる目的があらねばならぬと言ふことである。換言すれば人間は食ふために活きてゐるのではなく、活きんとするが爲めに食ふのと同じ意味である。此大切な人間としての本義を路み違へると、金を儲ける爲めには世間を胡麻化しても、人に迷惑を掛けてもよいと云ふやうな、

飛んだ考へが浮んで來るのである。編も危險な實國的性格者である。編の目的となす程識見のないものでは今回の震災後にあつても、不當の者は今日の非常時に處して如何にはない。此注意は各章について拂利益を得やうとして暴利取締令に して活き、如何にして生活の安定つて置いたが、特に擱筆に當つてによつて罰せられた人間が幾人あつ を得やうかと云ふ上に於て、金儲更に此言を復び繰返して置く。たかも知れぬ。是等が目的と手段 の要を說き、其方法を示したまでとを取間違へた連中であつて、最 とあつて、決して金儲を以て人生

大震後に於る **金儲の東京**（大尾

大正十二年十一月廿五日印刷
大正十二年十一月廿八日發行

金儲の東京奥付

定價金八十錢

編纂者　東京西巢鴨堀の内一五九　八雲貞雄
發行人　東京西巢鴨堀の内一五九　武信敏慶
印刷人　東京西巢鴨庚申塚二二八　岩本貞市
印刷所　東京西巢鴨庚申塚二二八　進々堂印刷所

發行所　東京西巢鴨宮仲一九八二　帝國書房
電話小石川四七二六番

終